

(12) 特許協力条約に基づいて公開された国際出願

(19) 世界知的所有権機関  
国際事務局



(43) 国際公開日  
2012年4月19日(19.04.2012)

PCT

(10) 国際公開番号

WO 2012/050193 A1

- (51) 国際特許分類:  
C07K 7/06 (2006.01) A61K 47/28 (2006.01)  
A61K 9/127 (2006.01) A61P 31/14 (2006.01)  
A61K 38/00 (2006.01) A61P 37/04 (2006.01)  
A61K 39/12 (2006.01) C12N 5/0783 (2010.01)  
A61K 47/24 (2006.01) C12N 7/04 (2006.01)
- (21) 国際出願番号: PCT/JP2011/073686
- (22) 国際出願日: 2011年10月14日(14.10.2011)
- (25) 国際出願の言語: 日本語
- (26) 国際公開の言語: 日本語
- (30) 優先権データ:  
特願 2010-231918 2010年10月14日(14.10.2010) JP
- (71) 出願人 (米国を除く全ての指定国について): 学校法人 埼玉医科大学 (SAITAMA MEDICAL UNIVERSITY) [JP/JP]; 〒3500495 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷3-8 Saitama (JP). 国立感染症研究所長が代表する日本国 (JAPAN AS REPRESENTED BY THE DIRECTOR-GENERAL OF NATIONAL INSTITUTE OF INFECTIOUS DISEASES) [JP/JP]; 〒1628640 東京都新宿区戸山一丁目2-3番1号 Tokyo (JP). 日油株式会社 (NOF CORPORATION) [JP/JP]; 〒1506019 東京都渋谷区恵比寿四丁目2-0番3号 Tokyo (JP).
- (72) 発明者: および
- (75) 発明者/出願人 (米国についてのみ): 松井 政則 (MATSUI, Masanori) [JP/JP]; 〒3500495 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷3-8 学校法人埼玉医科大学内 Saitama (JP). 内田 哲也 (UCHIDA, Tetsuya) [JP/JP]; 〒1628640 東京都新宿区戸山一丁目2-3番1号 国立感染症研究所内 Tokyo (JP). 種市 麻衣子 (TANEICHI, Maiko) [JP/JP]; 〒1628640 東京都新宿区戸山一丁目2-3番1号 国立感染症研究所内 Tokyo (JP). 三熊 愛 (MIKUMA, Ai) [JP/JP]; 〒2100865 神奈川県川崎市川崎区千鳥町3-3 日油株式会社内 Kanagawa (JP). 横山 晶一 (YOKOYAMA, Shoichi) [JP/JP]; 〒2100865 神奈川県川崎市川崎区千鳥町3-3 日油株式会社内 Kanagawa (JP).
- (74) 代理人: 高島 一 (TAKASHIMA, Hajime); 〒5410044 大阪府大阪市中央区伏見町四丁目1番1号 明治安田生命大阪御堂筋ビル Osaka (JP).
- (81) 指定国 (表示のない限り、全ての種類の国内保護が可能): AE, AG, AL, AM, AO, AT, AU, AZ, BA, BB, BG, BH, BR, BW, BY, BZ, CA, CH, CL, CN, CO, CR, CU, CZ, DE, DK, DM, DO, DZ, EC, EE, EG, ES, FI, GB, GD, GE, GH, GM, GT, HN, HR, HU, ID, IL, IN, IS, JP, KE, KG, KM, KN, KP, KR, KZ, LA, LC, LK, LR, LS, LT, LU, LY, MA, MD, ME, MG, MK, MN, MW, MX, MY, MZ, NA, NG, NI, NO, NZ, OM, PE, PG, PH, PL, PT, QA, RO, RS, RU, RW, SC, SD, SE, SG, SK, SL, SM, ST, SV, SY, TH, TJ, TM, TN, TR, TT, TZ, UA, UG, US, UZ, VC, VN, ZA, ZM, ZW.
- (84) 指定国 (表示のない限り、全ての種類の広域保護が可能): ARIPO (BW, GH, GM, KE, LR, LS, MW, MZ, NA, RW, SD, SL, SZ, TZ, UG, ZM, ZW), ユーラシア (AM, AZ, BY, KG, KZ, MD, RU, TJ, TM), ヨーロッパ (AL, AT, BE, BG, CH, CY, CZ, DE, DK, EE, ES, FI, FR, GB, GR, HR, HU, IE, IS, IT, LT, LU, LV, MC, MK, MT, NL, NO, PL, PT, RO, RS, SE, SI, SK, SM, TR), OAPI (BF, BJ, CF, CG, CI, CM, GA, GN, GQ, GW, ML, MR, NE, SN, TD, TG).
- 添付公開書類:  
— 国際調査報告 (条約第21条(3))  
— 明細書の別個の部分として表した配列リスト (規則 5.2(a))

(54) Title: EBOLA VIRUS LIPOSOME VACCINE

(54) 発明の名称: エボラウイルスリポソームワクチン

(57) Abstract: The present invention provides a peptide-bonded liposome that is a liposome to which a peptide is bonded, the peptide being an ebola virus antigen peptide that can induce cytolytic T lymphocytes restricted to HLA-A\*0201 or HLA-A\*2402, the liposome containing a liposome stabilization agent and a phospholipid having a acyl group having 14-24 carbon atoms and one unsaturated bond or a hydrocarbon group having 14-24 carbon atoms and one unsaturated bond, and the peptide being bonded to the surface of the liposome. Also, the present invention provides an ebola virus antigen peptide that can induce cytolytic T lymphocytes restricted to HLA-A\*0201 or HLA-A\*2402. The peptide-bonded liposome and the peptide are useful as an ebola virus vaccine or a cytolytic T lymphocyte activation agent.

(57) 要約: 本発明は、ペプチドが結合したリポソームであって、該ペプチドが、HLA-A\*0201又はHLA-A\*2402に拘束された細胞傷害性Tリンパ球を誘導し得るエボラウイルス抗原ペプチドであり、該リポソームが、不飽和結合を1個有する炭素数14~24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14~24の炭化水素基を有するリン脂質、及びリポソームの安定化剤を含有し、且つ該リポソームの表面に該ペプチドが結合している、ペプチド結合リポソームを提供する。また、本発明は、HLA-A\*0201又はHLA-A\*2402に拘束された細胞傷害性Tリンパ球を誘導し得るエボラウイルス抗原ペプチドを提供する。本発明のペプチド結合リポソームやペプチドは、細胞傷害性Tリンパ球活性化剤やエボラウイルスワクチンとして有用である。



WO 2012/050193 A1

## 明 細 書

発明の名称： エボラウイルスリポソームワクチン

### 技術分野

[0001] 本発明は、エボラウイルスワクチンとして有用なペプチド結合リポソーム、ペプチド、及びそれらの用途に関する。

### 背景技術

[0002] エボラウイルスは、フィロウイルス科のマイナス鎖RNAウイルスである。エボラウイルスはヒトを含む霊長類に重篤なエボラ出血熱を引き起こす。その致死率は極めて高く、時に90%を超える。従って、研究を行う場合には、BSL4の厳重な封じ込めが必要である。コウモリがエボラウイルスの自然宿主である可能性が報告されているが、不明な点も多い。エボラ出血熱は、1976年にスーダン及びザイールで大流行し、その後、中央・西アフリカで散発的に流行している。当初はアフリカにおける地域病と考えられていたが、1989年に米国のサル検疫室にて流行したことから、先進国におけるエボラウイルスの脅威が改めて認識されるに至った。近年においては、ペットのサルの輸入や、旅行者によるエボラウイルスの拡散、あるいはエボラウイルスを用いたバイオテロのリスクの増大が指摘されており、エボラ出血熱の効果的な予防又は治療法の開発が希求されているが、未だ効果的な予防又は治療法及びワクチンはない。

[0003] エボラウイルスに対する免疫反応について様々な研究成果が報告されている。エボラウイルスに感染しながら死亡には至らなかったヒトにおいて、エボラウイルス抗原に対するCTLや抗体が存在することが報告されている（非特許文献1）。マウスを用いた感染試験において、エボラウイルス抗原に対する中和抗体やCTLが有効であったことが報告されている（非特許文献2及び3）。また、サルを用いた感染試験において、DNAワクチンや組換えウイルスワクチンが細胞性免疫や液性免疫を誘導し、感染抑制に有効であったことが報告されている（非特許文献4～7）。一方、エボラウイルス抗

原に対する中和抗体は無効であったとの報告もあり（非特許文献8）、ヒトにおいては、エボラウイルスに対する抗体（液性免疫）はあまり有効ではないが、CTL（細胞性免疫）は有効であろうと推測されている。

[0004] 一方、生体の免疫応答を増強するための方法として、リポソーム製剤を用いる方法が知られている。

[0005] 特許文献1には、抗原が結合したリポソームを用いた、病原体感染細胞又は癌細胞を殺傷するためのCTLを効率よく特異的に増強することができ、感染症や癌の予防・治療に有用なT細胞活性化剤の調製法が開示されている。

[0006] また特許文献2には、鳥インフルエンザウイルスの、保存性の高い内部タンパク質配列中から、細胞傷害性Tリンパ球の調製に特に有効な抗原エピトープを見出したこと、該エピトープを含むペプチドを表面に結合したリポソームが、極めて強力に抗原特異的な細胞傷害性Tリンパ球を誘導し得ることが記載されている。

## 先行技術文献

### 特許文献

[0007] 特許文献1：特開2008-37831号公報  
特許文献2：国際公開第2010/061924号

### 非特許文献

[0008] 非特許文献1：Nat Immunol, 8: 1159, 2007  
非特許文献2：Science, 287: 1664, 2000  
非特許文献3：J Virol, 75: 2660, 2001  
非特許文献4：Nature, 408: 605, 2000  
非特許文献5：Nature, 424: 681, 2003  
非特許文献6：Nat Med, 11: 786, 2005  
非特許文献7：J Virol, 81: 6379, 2007  
非特許文献8：PLoS Pathogens, 3: e9, 2007

## 発明の概要

### 発明が解決しようとする課題

[0009] 本発明が解決しようとする課題は、エボラウイルス抗原に対する細胞傷害性Tリンパ球を効率よく誘導することができ、エボラウイルス感染及び該感染に起因する疾患に対する治療効果又は予防効果が期待できるペプチドやワクチンを提供することである。

### 課題を解決するための手段

[0010] 本発明者らは、上記課題に鑑み、鋭意検討を行い、エボラウイルス抗原中に、細胞傷害性Tリンパ球の誘導に特に有効な抗原エピトープを探索した結果、幾つかの優れた抗原エピトープを見出した。更に、このエピトープを含むペプチドが結合したリポソームによりワクチン接種を行うと、極めて強力に抗原特異的な細胞傷害性Tリンパ球を誘導し、エボラウイルス感染や該感染に伴う疾患を治療又は予防し得ることを見出し、本発明を完成させた。

[0011] すなわち、本発明は以下を提供するものである。

[1] ペプチドが結合したリポソームであって、  
該ペプチドが、

(1) エボラウイルス抗原タンパク質のアミノ酸配列に含まれる連続する9アミノ酸長の部分配列、又は

(2) (1) のアミノ酸配列において、1又は2個のアミノ酸が置換されたアミノ酸配列

を含み、且つ

9～11アミノ酸の長さを有する、

H L A - A \* 0 2 0 1 又は H L A - A \* 2 4 0 2 に拘束された細胞傷害性Tリンパ球を誘導し得るエボラウイルス抗原ペプチドであり；

該リポソームが、不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有するリン脂質、及びリポソームの安定化剤を含有し；且つ

該リポソームの表面に該ペプチドが結合している、

ペプチド結合リポソーム。

[2] リン脂質が、不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基を有するリン脂質である、[1]記載のペプチド結合リポソーム。

[3] アシル基がオレオイル基である、[1]又は[2]に記載のペプチド結合リポソーム。

[4] リン脂質が、ジアシルホスファチジルセリン、ジアシルホスファチジルグリセロール、ジアシルホスファチジン酸、ジアシルホスファチジルコリン、ジアシルホスファチジルエタノールアミン、サクシンイミジルージアシルホスファチジルエタノールアミン、及びマレイミドージアシルホスファチジルエタノールアミンから選ばれる少なくとも1つである、[1]～[3]のいずれかに記載のペプチド結合リポソーム。

[5] リポソームの安定化剤がコレステロールである、[1]～[4]のいずれかに記載のペプチド結合リポソーム。

[6] ペプチドが、リポソームを構成するリン脂質膜に含まれる不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有するリン脂質に結合している、[1]～[5]のいずれかに記載のペプチド結合リポソーム。

[7] リポソームが以下の組成を有する、[1]～[6]のいずれかに記載のペプチド結合リポソーム：

(A) 不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有するリン脂質 1～99.8モル%；

(B) リポソームの安定化剤 0.2～75モル%。

[8] リポソームが以下の組成を有する、[1]～[7]のいずれかに記載のペプチド結合リポソーム：

(I) 不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有する酸性リン脂質 1～85モル%；

(I I) 不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有する中性リン脂質 0.01～80モル%；

(I I I) ペプチドが結合した、不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有するリン脂質 0.2～80モル%；

(I V) リポソームの安定化剤 0.2～75モル%。

[9] エボラウイルス抗原タンパク質が、Nucleoprotein、virion structural protein 40、Glycoprotein、virion structural protein 30及びRNA-dependent RNA polymeraseからなる群から選択されるいずれかである、[1]～[8]のいずれかに記載のペプチド結合リポソーム。

[10] 部分配列が、配列番号1～23のいずれかで表されるアミノ酸配列である、[1]～[9]のいずれかに記載のペプチド結合リポソーム。

[11] HLA-A\*0201に拘束された細胞傷害性Tリンパ球を誘導し得るペプチドであって、

(1) 配列番号1～14のいずれかで表されるアミノ酸配列、又は

(2) 配列番号1～14のいずれかで表されるアミノ酸配列において、1又は2個のアミノ酸が置換されたアミノ酸配列を含み、且つ9～11アミノ酸の長さを有する、ペプチド。

[12] HLA-A\*2402に拘束された細胞傷害性Tリンパ球を誘導し得るペプチドであって、

(1) 配列番号15～23のいずれかで表されるアミノ酸配列、又は

(2) 配列番号15～23のいずれかで表されるアミノ酸配列において、1又は2個のアミノ酸が置換されたアミノ酸配列を含み、且つ9～11アミノ酸の長さを有する、ペプチド。

[13] [1]～[10]のいずれかに記載のペプチド結合リポソーム、或

いは [11] 又は [12] 記載のペプチドを含む、細胞傷害性Tリンパ球活性化剤。

[14] 更にアジュバントを含有することを特徴とする、[13] 記載の細胞傷害性Tリンパ球活性化剤。

[15] [1] ~ [10] のいずれかに記載のペプチド結合リポソーム、或いは [11] 又は [12] 記載のペプチドを含む、エボラウイルスワクチン。

[16] 更にアジュバントを含有することを特徴とする、[15] 記載のエボラウイルスワクチン。

### 発明の効果

[0012] 本発明のペプチド又はペプチド結合リポソームを用いれば、エボラウイルス抗原に対する細胞傷害性Tリンパ球を効率よく誘導することができ、エボラウイルス感染や該感染に起因する疾患に対する優れた治療又は予防効果が期待できる。

### 図面の簡単な説明

[0013] [図1]エボラウイルス抗原タンパク質に由来する種々のペプチドによるCD8<sup>+</sup>/IFN- $\gamma$ <sup>+</sup>T細胞の誘導。縦軸はIFN- $\gamma$ 発現を、横軸はCD8発現をそれぞれ示す。グラフ中の数値は、ゲートされたCD8<sup>+</sup>/IFN- $\gamma$ <sup>+</sup>T細胞のパーセンテージを示す。

[図2]種々のペプチド結合リポソームによるCD8<sup>+</sup>/IFN- $\gamma$ <sup>+</sup>T細胞の誘導。(×2)は2回免疫したことを示す。それ以外は全て1回免疫した。縦軸はIFN- $\gamma$ 発現を、横軸はCD8発現をそれぞれ示す。グラフ中の数値は、ゲートされたCD8<sup>+</sup>/IFN- $\gamma$ <sup>+</sup>T細胞のパーセンテージを示す。

[図3]種々のペプチド結合リポソームによるインビボにおけるCTL活性の誘導。免疫回数は1回である。縦軸は細胞数を、横軸はCFSEの発現をそれぞれ示す。グラフ中の数値は殺傷されたM2ゲート内の細胞のパーセンテージを示す。

[図4]種々のペプチド結合リポソームによるCD8<sup>+</sup>/IFN- $\gamma$ <sup>+</sup>T細胞の誘

導。縦軸はIFN- $\gamma$ 発現を、横軸はCD8発現をそれぞれ示す。グラフ中の数値は、ゲートされたCD8<sup>+</sup>/IFN- $\gamma$ <sup>+</sup>T細胞のパーセンテージを示す。

[図5]種々のペプチド結合リポソームによるインビボにおけるCTL活性の誘導。縦軸は細胞数を、横軸はCFSEの発現をそれぞれ示す。グラフ中の数値は殺傷されたゲート内の細胞のパーセンテージを示す。

### 発明を実施するための形態

#### [0014] 1. ペプチド

本発明は、HLA-A\*0201又はHLA-A\*2402に拘束された細胞傷害性Tリンパ球を誘導し得、9~11アミノ酸の長さを有する、エボラウイルス抗原ペプチド（本発明のペプチド）を提供する。本発明のペプチドは、

- (1) エボラウイルス抗原タンパク質のアミノ酸配列に含まれる連続する9アミノ酸長の部分配列、又は
- (2) (1)のアミノ酸配列において、1又は2個のアミノ酸が置換されたアミノ酸配列を含む。

[0015] エボラウイルス抗原タンパク質は、好ましくはNucleoprotein (NP)、virion structural protein 40 (VP40)、Glycoprotein (GP)、virion structural protein 30 (VP30) 及びRNA-dependent RNA polymerase (L) からなる群から選択されるいずれかのタンパク質である。

[0016] 誘導される細胞傷害性Tリンパ球がHLA-A\*2402拘束性である場合、エボラウイルス抗原タンパク質は、好ましくはRNA-dependent RNA polymerase (L) である。

[0017] エボラウイルスには、ザイール株、スーダン株、レストン株、コートジボアール株、ブンディブギョ株が包含される。エボラウイルスは、好ましくは



ザイール株である。

[0018] エボラウイルスザイール株の Nucleoprotein (NP) の代表的なアミノ酸配列を配列番号 24 に示す。

エボラウイルスザイール株の virion structural protein 40 (VP40) の代表的なアミノ酸配列を配列番号 25 に示す。

エボラウイルスザイール株の Glycoprotein (GP) の代表的なアミノ酸配列を配列番号 26 に示す。

エボラウイルスザイール株の virion structural protein 30 (VP30) の代表的なアミノ酸配列を配列番号 27 に示す。

エボラウイルスザイール株の RNA-dependent RNA polymerase (L) の代表的なアミノ酸配列を配列番号 28 に示す。

[0019] 一局面において、本発明は、HLA-A\*0201 に拘束された細胞傷害性 T リンパ球を誘導し得るペプチドであって、

(1') 配列番号 1~14 のいずれかで表されるアミノ酸配列、又は

(2') 配列番号 1~14 のいずれかで表されるアミノ酸配列において、1 又は 2 個のアミノ酸が置換されたアミノ酸配列

を含み、且つ 9~11 アミノ酸の長さを有する、ペプチド (本発明のペプチド) を提供する。

[0020] 一局面において、本発明は、エボラウイルス抗原タンパク質中に以下の優れたエピトープ配列 (本発明のエピトープ配列) を見出したことに基づき完成されたものである：

・配列番号 1~14 のいずれかで表されるアミノ酸配列

・配列番号 1~14 のいずれかで表されるアミノ酸配列において、1 又は 2 個のアミノ酸が置換されたアミノ酸配列 (ここで、該アミノ酸配列からなるペプチドが HLA-A\*0201 に拘束された細胞傷害性 T リンパ球を誘導し得る)。

[0021] 一局面において、配列番号1～14で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のタンパク質である

Nucleoprotein (NP) (配列番号1～2)、  
virion structural protein 40 (VP40)  
(配列番号3)、

Glycoprotein (GP) (配列番号4～7)、  
virion structural protein 30 (VP30)  
(配列番号8) 又は

RNA-dependent RNA polymerase (L) (配列  
番号9～14)

のアミノ酸配列中に含まれる連続する部分配列に相当する。

[0022] 配列番号1で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のNP  
のアミノ酸配列に含まれる第56番目のイソロイシンから始まる連続する9  
アミノ酸長の部分配列に相当する (NP-56)。

配列番号2で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のNP  
のアミノ酸配列に含まれる第401番目のアルギニンから始まる連続する9  
アミノ酸長の部分配列に相当する (NP-401)。

配列番号3で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のVP  
40のアミノ酸配列に含まれる第73番目のフェニルアラニンから始まる連  
続する9アミノ酸長の部分配列に相当する (VP40-73)。

配列番号4で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のGP  
のアミノ酸配列に含まれる第25番目のイソロイシンから始まる連続する9  
アミノ酸長の部分配列に相当する (GP-25)。

配列番号5で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のGP  
のアミノ酸配列に含まれる第160番目のフェニルアラニンから始まる連続  
する9アミノ酸長の部分配列に相当する (GP-160)。

配列番号6で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のGP  
のアミノ酸配列に含まれる第252番目のフェニルアラニンから始まる連続

する9アミノ酸長の部分配列に相当する（GP-252）。

配列番号7で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のGPのアミノ酸配列に含まれる第546番目のグリシンから始まる連続する9アミノ酸長の部分配列に相当する（GP-546）。

配列番号8で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のVP30のアミノ酸配列に含まれる第94番目のセリンから始まる連続する9アミノ酸長の部分配列に相当する（VP30-94）。

配列番号9で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のLのアミノ酸配列に含まれる第209番目のアラニンから始まる連続する9アミノ酸長の部分配列に相当する（L-209）。

配列番号10で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のLのアミノ酸配列に含まれる第293番目のリジンから始まる連続する9アミノ酸長の部分配列に相当する（L-293）。

配列番号11で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のLのアミノ酸配列に含まれる第771番目のアルギニンから始まる連続する9アミノ酸長の部分配列に相当する（L-771）。

配列番号12で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のLのアミノ酸配列に含まれる第932番目のグリシンから始まる連続する9アミノ酸長の部分配列に相当する（L-932）。

配列番号13で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のLのアミノ酸配列に含まれる第1099番目のアラニンから始まる連続する9アミノ酸長の部分配列に相当する（L-1099）。

配列番号14で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のLのアミノ酸配列に含まれる第1955番目のバリンから始まる連続する9アミノ酸長の部分配列に相当する（L-1955）。

[0023] (2') における置換の態様は、該アミノ酸配列からなるペプチドがHLA-A\*0201に拘束された細胞傷害性Tリンパ球を誘導し得る限り特に限定されないが、ザイール株とは異なるエボラウイルス株（型・亜型）（例

、スーダン株、レストン株、コートジボアール株、ブンディブギョ株)の同一抗原における対応するエピトープ配列中に生じた既知のアミノ酸変異を反映したものが好適な態様として挙げられる。

[0024] 更なる局面において、本発明は、HLA-A\*2402に拘束された細胞傷害性Tリンパ球を誘導し得るペプチドであって、

(1') 配列番号15~23のいずれかで表されるアミノ酸配列、又は  
(2') 配列番号15~23のいずれかで表されるアミノ酸配列において、1又は2個のアミノ酸が置換されたアミノ酸配列  
を含み、且つ9~11アミノ酸の長さを有する、ペプチド(本発明のペプチド)を提供する。

[0025] 更なる局面において、本発明は、エボラウイルスのRNA-dependent RNA polymerase(L)中に以下の優れたエピトープ配列(本発明のエピトープ配列)を見出したことに基づき完成されたものである:

- ・配列番号15~23のいずれかで表されるアミノ酸配列
- ・配列番号15~23のいずれかで表されるアミノ酸配列において、1又は2個のアミノ酸が置換されたアミノ酸配列(ここで、該アミノ酸配列からなるペプチドがHLA-A\*2402に拘束された細胞傷害性Tリンパ球を誘導し得る)。

[0026] 更なる局面において、配列番号15~23で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のRNA-dependent RNA polymerase(L)のアミノ酸配列中に含まれる連続する部分配列に相当する。

[0027] 配列番号15で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のLのアミノ酸配列に含まれる第105番目のリジンから始まる連続する9アミノ酸長の部分配列に相当する(L-105)。

配列番号16で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のLのアミノ酸配列に含まれる第407番目のスレオニンから始まる連続する9

アミノ酸長の部分配列に相当する（L-407）。

配列番号17で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のLのアミノ酸配列に含まれる第1087番目のセリンから始まる連続する9アミノ酸長の部分配列に相当する（L-1087）。

配列番号18で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のLのアミノ酸配列に含まれる第1359番目のグルタミンから始まる連続する9アミノ酸長の部分配列に相当する（L-1359）。

配列番号19で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のLのアミノ酸配列に含まれる第1847番目のリジンから始まる連続する9アミノ酸長の部分配列に相当する（L-1847）。

配列番号20で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のLのアミノ酸配列に含まれる第1939番目のロイシンから始まる連続する9アミノ酸長の部分配列に相当する（L-1939）。

配列番号21で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のLのアミノ酸配列に含まれる第1943番目のバリンから始まる連続する9アミノ酸長の部分配列に相当する（L-1943）。

配列番号22で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のLのアミノ酸配列に含まれる第2000番目のトリプトファンから始まる連続する9アミノ酸長の部分配列に相当する（L-2000）。

配列番号23で表されるアミノ酸配列は、エボラウイルスザイール株のLのアミノ酸配列に含まれる第2046番目のグルタミンから始まる連続する9アミノ酸長の部分配列に相当する（L-2046）。

[0028] 更なる局面において、（2' '）における置換の態様は、該アミノ酸配列からなるペプチドがHLA-A\*2402に拘束された細胞傷害性Tリンパ球を誘導し得る限り特に限定されないが、ザイール株とは異なるエボラウイルス株（型・亜型）（例、スーダン株、レストン株、コートジボアール株、ブンディブギョ株）の同一抗原における対応するエピトープ配列中に生じた既知のアミノ酸変異を反映したものが好適な態様として挙げられる。

[0029] 本発明のエピトープ配列からなるペプチド（本発明のエピトープペプチド）は、以下の優れた特性を有する：

（A）本発明のエピトープペプチドは、世界的に最もポピュラーなヒト主要組織適合性抗原（HLA）の型であるHLA-A\*0201又はHLA-A\*2402への結合性に優れており、HLA-A\*0201又はHLA-A\*2402上に安定に提示される。

（B）本発明のエピトープペプチドは、上記（A）の特性を有するため、HLA-A\*0201又はHLA-A\*2402に拘束された細胞傷害性Tリンパ球を強力に誘導することができる。「抗原がHLAに拘束された細胞傷害性Tリンパ球を誘導する」とは、特定のHLA（例えばHLA-A\*0201）を発現している哺乳動物（例えばヒト、トランスジェニックマウス等）を抗原で免疫した場合に、該哺乳動物の生体内において、当該HLAに拘束され、且つ当該抗原を特異的に認識する細胞傷害性Tリンパ球の数及び／又は活性（例えばIFN- $\gamma$ 産生や細胞傷害活性）が上昇することを意味する。上述のように、HLA-A\*0201及びHLA-A\*2402は世界的に最もポピュラーなHLAであることから、本発明のエピトープペプチドは、人種差に関わらず、世界中の多くのヒト（特に、HLA-A\*0201又はHLA-A\*2402を発現するヒト）の細胞傷害性Tリンパ球を誘導し、細胞性免疫を活性化することができる。

[0030] 本発明のペプチドは、上記本発明のエピトープペプチド自体であるか、或いは細胞（好ましくはヒト樹状細胞）内でプロテアソーム等の作用により切断され、上記本発明のエピトープペプチドを生じ得る。従って、本発明のペプチドは、本発明のエピトープペプチドと実質的に同一の優れた特性を有し、下記に記したような本発明の細胞傷害性Tリンパ球活性化剤及びエボラウイルスワクチンの製造に供した場合、エボラウイルスが感染した細胞の殺傷やエボラウイルスの感染防御に優れた効果を発揮することが期待できる。

[0031] 本発明のペプチドの長さは、特に限定されないが通常9～11アミノ酸、好ましくは9～10アミノ酸、より好ましくは9アミノ酸である。該ペプチ

ドの長さが10アミノ酸以上である場合には、該ペプチドは、本発明のエピトープ配列のN末端側及び／又はC末端側に付加配列を有する。付加配列の長さやアミノ酸配列は、該ペプチドの上記特性を損なわない限り特に限定されない。例えば、該付加配列は、各エピトープ配列が由来するエボラウイルスザイル株のタンパク質のアミノ酸配列において、当該エピトープ配列に隣接して実際に存在するアミノ酸配列であり得る。例えば、本発明のペプチドが配列番号1で表されるアミノ酸配列を含む場合、該ペプチドに含まれ得る付加配列はエボラウイルスザイル株のNucleoprotein (NP)のアミノ酸配列中に含まれる、配列番号1からなる部分アミノ酸配列に隣接して実際に存在するアミノ酸配列であり得る。また該ペプチドが、細胞内で主要組織適合抗原複合体 (MHC) 上に提示される際に、MHCの個人差 (多型性) による提示抗原の選別を克服できるような残基なども、付加配列として好ましい。

[0032] 本発明のペプチドは、例えば、液相合成又は固相ペプチド合成等の公知のペプチド合成技術によって調製できる。或いは、該ペプチドを発現し得る発現ベクターを導入した形質変換体 (大腸菌等) を培養し、その培養物からアフニティカラム等の周知の精製技術により該ペプチドを単離することにより、該ペプチドを製造することができる。該ペプチドを発現し得る発現ベクターは、周知の遺伝子工学的技術を用いて、該ペプチドをコードするポリヌクレオチドを適切な発現ベクター中のプロモーターの下流に連結することにより構築することができる。

#### [0033] 2. ペプチド結合リポソーム

本発明は、上記本発明のペプチドが結合したリポソームであって、該リポソームが、不飽和結合を1個有する炭素数14~24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14~24の炭化水素基を有するリン脂質、及びリポソームの安定化剤を含有し；且つ該リポソームの表面に上記本発明のペプチドが結合している、ペプチド結合リポソーム (本発明のペプチド結合リポソーム) を提供する。

- [0034] 一局面において、本発明の課題の一つは、エボラウイルス感染細胞（好ましくは、エボラウイルス感染により本発明のペプチドをHLA-A\*0201上に提示した細胞）を殺傷するための細胞傷害性Tリンパ細胞（CD8+T細胞、CTL）を効率よく特異的に増強することである。この観点から、本発明のペプチド結合リポソームに用いられる本発明のペプチドは、好ましくは、配列番号1、2、3、5、6、8、9、10、11、13又は14で表されるアミノ酸配列を含むものである。
- [0035] 更なる局面において、本発明の課題の一つは、エボラウイルス感染細胞（好ましくは、エボラウイルス感染により本発明のペプチドをHLA-A\*2402上に提示した細胞）を殺傷するための細胞傷害性Tリンパ細胞（CD8+T細胞、CTL）を効率よく特異的に増強することである。この観点から、本発明のペプチド結合リポソームに用いられる本発明のペプチドは、好ましくは、配列番号15、16、17、20、21又は22で表されるアミノ酸配列を含むものである。
- [0036] 本発明のペプチド結合リポソームのリポソーム部分を構成するリン脂質膜は、両親媒性界面活性剤であるリン脂質が、極性基を水相側に向けて界面を形成し、疎水基が界面の反対側に向く構造を有する。ここで、リポソームとは閉鎖空間を有するリン脂質二重膜のことを指す。
- [0037] 本発明のペプチド結合リポソームに含まれるペプチドは、それが有する官能基を介してリポソームの表面に結合することができる。リポソーム表面への結合に用いられる該ペプチド中の官能基としては、アミノ基、チオール基、カルボキシル基、水酸基、ジスルフィド基又はメチレン鎖を有する炭化水素基（アルキル基等）からなる疎水基等が挙げられる。これらの内、アミノ基、チオール基、カルボキシル基、水酸基及びジスルフィド基は共有結合により、アミノ基及びカルボキシル基はイオン結合により、疎水基は疎水基同士で疎水結合により、該ペプチドをリポソームの表面に結合することができる。該ペプチドは、好ましくはアミノ基、カルボキシル基又はチオール基を介してリポソームの表面に結合する。



[0038] 本発明のペプチド結合リポソームに含まれるペプチドが有する官能基を介して、該ペプチドが安定にリポソームに結合するため、リポソームを構成するリン脂質膜は、アミノ基、サクシンイミド基、マレイミド基、チオール基、カルボキシル基、水酸基、ジスルフィド基、メチレン鎖を有する炭化水素基（アルキル基等）からなる疎水基等の官能基を有することが望ましい。リポソームを構成するリン脂質膜が有する官能基は、好ましくは、アミノ基、サクシンイミド基又はマレイミド基である。該ペプチドのリポソームへの結合に関与する、該ペプチドの有する官能基とリポソームを構成するリン脂質膜が有する官能基の組み合わせは、本発明の効果に影響しない範囲において自由に選択することができるが、好ましい組み合わせとしては、それぞれ、アミノ基とアルデヒド基、アミノ基とアミノ基、アミノ基とサクシンイミド基、チオール基とマレイミド基等が挙げられる。イオン結合及び疎水結合は、リポソームへのペプチドの結合手順が簡便であり、ペプチド結合リポソームの調製容易性の点から好ましく、また、共有結合は、リポソーム表面のペプチドの結合安定性の点又はペプチド結合リポソームを実用する際の保存安定性の点から好ましい。本発明のペプチド結合リポソームは、その構成成分であるリポソームの表面に細胞傷害性Tリンパ球活性化効果を有するペプチドが結合していることを1つの特徴としている。従って、実用段階で、例えば注射行為によって生体内に投与された後にも、該ペプチドがリポソームの表面に安定に結合していることが、本発明の効果をより高める点で好ましい。このような観点から、該ペプチドとリポソームとの結合としては、共有結合が好ましい。

[0039] 本発明のペプチド結合リポソームのリポソーム部分を構成するリン脂質膜は、不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有するリン脂質、及びリポソームの安定化剤を含有してなる。

[0040] 不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基を有するリン脂質における、該アシル基の炭素数は、好ましくは16～22であり、更に好まし

くは18～22であり、最も好ましくは18である。該アシル基としては、具体的には、パルミトオレオイル基、オレオイル基、エルコイル基等が挙げられ、最も好ましくはオレオイル基である。

[0041] 不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有するリン脂質における、該炭化水素基の炭素数は、好ましくは16～22であり、更に好ましくは18～22であり、最も好ましくは18である。該炭化水素基としては、具体的には、テトラデセニル基、ヘキサデセニル基、オクタデセニル基、C20モノエン基、C22モノエン基、C24モノエン基等が挙げられる。

[0042] リン脂質が有するグリセリン残基の1-位、及び2-位に結合する不飽和のアシル基又は不飽和炭化水素基は、同一でも異なってもよい。工業的な生産性の観点から、1-位及び2-位の基が同一であることが好ましい。

[0043] リン脂質としては、不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基を有するリン脂質が好ましく用いられる。

[0044] 本発明の課題の一つは、エボラウイルス感染細胞（好ましくは、エボラウイルス感染により本発明のペプチドをHLA-A\*0201上に提示した細胞、又はエボラウイルス感染により本発明のペプチドをHLA-A\*2402上に提示した細胞）を殺傷するための細胞傷害性Tリンパ細胞（CD8+T細胞、CTL）を効率よく特異的に増強することである。実用上十分なレベルにCTL活性を増強させる点から、リン脂質は不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基を有することが好ましい。アシル基の炭素数が13未満であると、リポソームの安定性が悪くなったり、またCTL活性増強効果が不十分になる場合がある。また、アシル基の炭素数が24を超えると、リポソームの安定性が悪くなる場合がある。

[0045] 不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有するリン脂質としては、酸性リン脂質、中性リン脂質、ペプチドを結合することのできる官能基を有する反応性リン脂質等の種類が挙げられる。これらは、種々の要求に応じて、その

種類、割合を適宜選択することができる。

[0046] 酸性リン脂質としては、ホスファチジルセリン、ホスファチジルグリセロール、ホスファチジン酸、ホスファチジリンイノシトール等を用いることができる。CTL活性を実用上十分なレベルに増強する点、及び工業的な供給性、医薬品として用いるための品質等の点から、不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基を有するジアシルホスファチジルセリン、ジアシルホスファチジルグリセロール、ジアシルホスファチジン酸、及びジアシルホスファチジリンイノシトールが好ましく用いられる。酸性リン脂質は、リポソームの表面にアニオン性電離基を与えるので、リポソーム表面にマイナスのゼータ電位を付与する。このためリポソームは、電荷的な反発力を得、水性溶媒中で安定な製剤として存在できる。このように、酸性リン脂質は、本発明のペプチド結合リポソームが水性溶媒中にある際のリポソームの安定性を確保する点で重要である。

[0047] 中性リン脂質としては、例えば、ホスファチジルコリン等を用いることができる。本発明で用いることができる中性リン脂質は、本発明が課題として取り組むCTL活性増強を達成する範囲において、その種類・量を適宜選択して用いることができる。中性リン脂質は、酸性リン脂質及び本発明のペプチドを結合したリン脂質に比べ、リポソームを安定化する機能が高く、膜の安定性を向上させ得る。かかる観点から、本発明のペプチド結合リポソームのリポソーム部分を構成するリン脂質膜は、中性リン脂質を含有することが好ましい。CTL活性増強効果を達成するために用いる酸性リン脂質、ペプチド結合のための反応性リン脂質及びリポソームの安定化剤の含有量を確保した上で、中性リン脂質の使用量を決定できる。

[0048] 本発明のペプチド結合リポソームにおいては、本発明のペプチドがリポソームを構成するリン脂質膜に含まれる不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有するリン脂質に結合することにより、リポソームの表面に結合する。

[0049] このペプチド結合のためのリン脂質として、本発明のペプチドが結合する

こののできる官能基を有する反応性リン脂質が用いられる。不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有する反応性リン脂質は、種々の要求に応じて、その種類、割合が適宜選択される。前記リン脂質と同様に、反応性リン脂質においても、リン脂質に含まれる不飽和アシル基又は不飽和炭化水素基の炭素数が24を超えるか、14未満である場合は好ましくない。

[0050] 反応性リン脂質としては、ホスファチジルエタノールアミン又はその末端変性体が挙げられる。また、ホスファチジルグリセロール、ホスファチジルセリン、ホスファチジン酸、ホスファチジルイノシトール及びこれらの末端変性体も反応性リン脂質として用いることができる。工業的な入手性、本発明のペプチドとの結合工程の簡便性、収率等の点から、ホスファチジルエタノールアミン又はその末端変性体が好ましく用いられる。ホスファチジルエタノールアミンはその末端に本発明のペプチドを結合することのできるアミノ基を有する。更に、CTL活性を実用上十分なレベルに増強する点、リポソームでの安定性、及び工業的な供給性、医薬品として用いるための品質等の点から、不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基を有するジアシルホスファチジルエタノールアミン又はその末端変性体が最も好ましく用いられる。

[0051] ジアシルホスファチジルエタノールアミンは、例えば、ジアシルホスファチジルコリンを原料に、ホスホリパーゼDを用いてコリンとエタノールアミンを塩基交換反応させることで得ることができる。具体的には、ジアシルホスファチジルコリンを溶解したクロロホルム溶液と、ホスホリパーゼD及びエタノールアミンを溶解した水を適宜比率において混合し粗反応物を得ることができる。粗反応物を、クロロホルム／メタノール／水系溶媒を用いてシリカゲルカラムで精製し目的のジアシルホスファチジルエタノールアミンを得ることができる。当業者であれば、溶媒組成比等のカラム精製条件を適宜選択して実施することが可能である。

[0052] 末端変性体としては、ジアシルホスファチジルエタノールアミンのアミノ

基に2価反応性化合物の一方の末端を結合させたジアシルホスファチジルエタノールアミン末端変性体が挙げられる。2価反応性化合物としては、ジアシルホスファチジルエタノールアミンのアミノ基と反応することができるアルデヒド基又はコハク酸イミド基を少なくとも片方の末端に有する化合物が利用できる。アルデヒド基を有する2価反応性化合物として、グリオキサール、グルタルアルデヒド、サクシンジアルデヒド、テレフタルアルデヒド等が挙げられる。好ましくは、グルタルアルデヒドが挙げられる。コハク酸イミド基を有する2価反応性化合物として、ジチオビス（サクシンイミジルプロピオネート）、エチレングリコールビス（サクシンイミジルサクシネート）、ジサクシンイミジルサクシネート、ジサクシンイミジルスベレート、又はジサクシンイミジルグルタレートが等挙げられる。

[0053] また、一方の末端にサクシンイミド基、他方の片末端にマレイミド基を有する2価反応性化合物として、N-サクシンイミジル-4-(p-マレイミドフェニル)ブチレート、スルホサクシンイミジル-4-(p-マレイミドフェニル)ブチレート、N-サクシンイミジル-4-(p-マレイミドフェニル)アセテート、N-サクシンイミジル-4-(p-マレイミドフェニル)プロピオネート、サクシンイミジル-4-(N-マレイミドエチル)-シクロヘキサン-1-カルボキシレート、スルホサクシンイミジル-4-(N-マレイミドエチル)-シクロヘキサン-1-カルボキシレート、N-( $\gamma$ -マレイミドブチリルオキシ)サクシンイミド、N-( $\epsilon$ -マレイミドカプロイルオキシ)サクシンイミド等が挙げられる。このような2価反応性化合物を用いると、官能基としてマレイミド基を有するジアシルホスファチジルエタノールアミン末端変性体を得られる。以上のような2価反応性化合物の一方の末端の官能基をジアシルホスファチジルエタノールアミンのアミノ基に結合し、ジアシルホスファチジルエタノールアミン末端変性体を得ることができる。

[0054] リポソームの表面にペプチドを結合する方法としては、例えば、上記の反応性リン脂質を含有するリポソームを調製し、次にペプチドを加えてリポソ

ームの反応性リン脂質にペプチドを結合する方法を挙げることができる。また、予めペプチドを反応性リン脂質に結合しておき、次に、得られたペプチドが結合した反応性リン脂質を、反応性リン脂質以外のリン脂質及びリポソームの安定化剤と混合することによっても、ペプチドを表面に結合したリポソームを得ることができる。反応性リン脂質へのペプチドの結合方法は、当該技術分野において周知である。

[0055] 本発明のペプチド結合リポソームのリポソーム部分を構成するリン脂質膜は、不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有するリン脂質を少なくとも1種、例えば2種以上、好ましくは3種以上含有する。

[0056] 例えば、本発明のペプチド結合リポソームのリポソーム部分を構成するリン脂質膜は、ジアシルホスファチジルセリン、ジアシルホスファチジルグリセロール、ジアシルホスファチジン酸、ジアシルホスファチジルコリン、ジアシルホスファチジルエタノールアミン、サクシンイミジルージアシルホスファチジルエタノールアミン、及びマレイミド-ジアシルホスファチジルエタノールアミンから選ばれる少なくとも1種、例えば2種以上、好ましくは3種以上の、不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有するリン脂質を含有する。

[0057] また、本発明のペプチド結合リポソームのリポソーム部分を構成するリン脂質膜は、  
不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有する酸性リン脂質、  
不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有する中性リン脂質、及び  
不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有する反応性リン脂質を、それぞれ、少なくとも1種含有することが好ましい。

[0058] 本発明において、リポソームの安定化剤としては、ステロール類やトコフェロール類を用いることができる。前記のステロール類としては、一般にステロール類として知られるものであればよく、例えば、コレステロール、シトステロール、カンペステロール、スチグマステロール、ブラシカステロール等が挙げられ、入手性等の点から、特に好ましくは、コレステロールが用いられる。前記のトコフェロール類としては、一般にトコフェロールとして知られるものであればよく、例えば、入手性等の点から、市販の $\alpha$ -トコフェロールが好ましく挙げられる。

[0059] さらに、本発明の効果を損なわない限り、本発明のペプチド結合リポソームのリポソーム部分を構成するリン脂質膜は、リポソームを構成することのできる、公知の構成成分を含んでいてもよい。

[0060] 本発明のペプチド結合リポソームのリポソーム部分を構成するリン脂質膜の組成としては、例えば以下を挙げることができる：

(A) 不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有するリン脂質 1～99.8モル%；

(B) リポソームの安定化剤 0.2～75モル%

尚、各成分の含有量は、ペプチド結合リポソームのリポソーム部分を構成するリン脂質膜の全構成成分に対するモル%として表示する。

上記成分(A)の含有量は、リポソームの安定性の観点から、好ましくは10～90モル%、より好ましくは30～80モル%、更に好ましくは50～70モル%である。

上記成分(B)の含有量は、リポソームの安定性の観点から、好ましくは5～70モル%、より好ましくは10～60モル%、更に好ましくは20～50モル%である。安定化剤の含有量が75モル%を超えるとリポソームの安定性が損なわれ好ましくない。

[0061] 上記成分(A)には、以下が含まれる：

(a) ペプチドが結合していない、不飽和結合を1個有する炭素数14～2

4のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有するリン脂質、及び

(b) ペプチドが結合した、不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有するリン脂質。

上記成分(a)の含有量は、通常0.01～85モル%、好ましくは0.1～80モル%、より好ましくは0.1～60モル%、更に好ましくは0.1～50モル%である。

上記成分(b)の含有量は、通常0.2～80モル%、好ましくは0.3～60モル%、より好ましくは0.4～50モル%、更に好ましくは0.5～25モル%である。含有量が0.2モル%未満であると、本発明のペプチドの量が低下するため、実用上十分なレベルに細胞傷害性Tリンパ球を活性化することが困難となり、80モル%を超えると、リポソームの安定性が低下する。

[0062] 上記成分(a)のリン脂質には、通常、上述の酸性リン脂質及び中性リン脂質が含まれる。また、上記成分(b)のリン脂質には、上述の反応性リン脂質が含まれる。

[0063] 酸性リン脂質の含有量は、通常1～85モル%、好ましくは2～80モル%、より好ましくは4～60モル%、更に好ましくは5～40モル%である。含有量が1モル%未満であると、ゼータ電位が小さくなりリポソームの安定性が低くなり、また、実用上十分なレベルに細胞傷害性Tリンパ球を活性化することが困難となる。一方、含有量が85モル%を超えると、結果として、リポソームのペプチドが結合したリン脂質の含有量が低下し、実用上十分なレベルに細胞傷害性Tリンパ球を活性化することが困難となる。

[0064] 中性リン脂質の含有量は、通常0.01～80モル%、好ましくは0.1～70モル%、より好ましくは0.1～60モル%、更に好ましくは0.1～50モル%である。含有量が80モル%を超えると、リポソームに含まれる酸性リン脂質、ペプチドが結合したリン脂質及びリポソームの安定化剤の



含有量が低下し、実用上十分なレベルに細胞傷害性Tリンパ球を活性化することが困難となる。

[0065] ペプチドが結合したリン脂質は、前記の反応性リン脂質にペプチドが結合して得られるもので、反応性リン脂質がペプチドと結合する割合は、本発明の効果を妨げない範囲において、結合に用いる官能基の種類、結合処理条件等を適宜実施して選択することができる。

[0066] 例えば、ジアシルホスファチジルエタノールアミンの末端アミノ基に2価反応性化合物であるジサクシンイミジルサクシネートの片末端を結合して得たジアシルホスファチジルエタノールアミンの末端変性体を反応性リン脂質として用いる場合、結合処理諸条件の選択によって反応性リン脂質の10～99%をペプチドと結合することができる。この場合、ペプチドと結合していない反応性リン脂質は、酸性リン脂質となってリポソームに含有される。

[0067] 本発明のペプチド結合リポソームのリポソーム部分を構成するリン脂質膜の好ましい態様としては、以下の組成を挙げることができる：

(I) 不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有する酸性リン脂質1～85モル%；

(II) 不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有する中性リン脂質0.01～80モル%；

(III) ペプチドが結合した、不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有するリン脂質0.2～80モル%；

(IV) リポソームの安定化剤0.2～75モル%。

(合計100モル%)

[0068] 本発明のペプチド結合リポソームのリポソーム部分を構成するリン脂質膜のより好ましい態様としては、以下の組成を挙げることができる：

上記成分 (I) 2～80モル%

上記成分 (I I) 0.1~70モル%

上記成分 (I I I) 0.3~60モル%

上記成分 (I V) 10~70モル%

(合計100モル%)

[0069] 本発明のペプチド結合リポソームのリポソーム部分を構成するリン脂質膜の更に好ましい態様としては、以下の組成を挙げることができる：

上記成分 (I) 4~60モル%

上記成分 (I I) 0.1~60モル%

上記成分 (I I I) 0.4~50モル%

上記成分 (I V) 20~60モル%

(合計100モル%)

[0070] 本発明のペプチド結合リポソームのリポソーム部分を構成するリン脂質膜のとりわけ好ましい態様としては、以下の組成を挙げることができる：

上記成分 (I) 5~40モル%

上記成分 (I I) 0.1~50モル%

上記成分 (I I I) 0.5~25モル%

上記成分 (I V) 25~55モル%

(合計100モル%)

[0071] 本発明のペプチド結合リポソームは、リポソーム部分を構成するリン脂質膜中のリン脂質に含まれる不飽和アシル基又は不飽和炭化水素基の炭素数が14~24であることを特徴とするが、本発明の効果を妨げない範囲で、炭素数が14未満又は24を超える不飽和アシル基又は不飽和炭化水素基を含むリン脂質を含んでいても差支えない。本発明のペプチド結合リポソームのリポソーム部分を構成するリン脂質膜中のリン脂質に含まれる全ての不飽和アシル基又は不飽和炭化水素基の合計数に対して、炭素数が14~24である不飽和アシル基又は不飽和炭化水素基の数の割合は、例えば50%以上、好ましくは60%以上、より好ましくは75%以上、更に好ましくは90%以上、最も好ましくは97%以上（例えば実質的に100%）である。

- [0072] 本発明のペプチド結合リポソームのリポソーム部分を構成するリン脂質膜は、本発明の効果を妨げない限り、炭素数が14～24の範囲のアシル基又は炭化水素基を有する、リン脂質以外の脂質を含んでもよい。該脂質の含有量は、通常は40モル%以下であり、好ましくは20モル%以下、より好ましくは10モル%以下、更に好ましくは5モル%以下（例えば実質的に0モル%）である。
- [0073] 本発明のペプチド結合リポソームのリポソーム部分は、構成成分であるリン脂質、反応性リン脂質、リポソームの安定化剤、ペプチド等を用い、適宜配合や加工を行い、これを適当な溶媒に添加する等の方法で得ることができる。
- [0074] 例えば、エクストルージョン法、ボルテックスミキサー法、超音波法、界面活性剤除去法、逆相蒸発法、エタノール注入法、プレベシクル法、フレンチプレス法、W/O/Wエマルジョン法、アニーリング法、凍結融解法等の製造方法が挙げられる。リポソームの形態は、特に限定されず、前記のリポソーム製造方法を適宜選択することにより、多重層リポソーム、小さな一枚膜リポソーム、大きな一枚膜リポソーム等、種々の大きさや形態を有するリポソームを製造することができる。
- [0075] リポソームの粒径は特に限定されるものではないが、保存安定性等の点から、粒径は20～600nmが挙げられ、好ましくは30～500nm、次に好ましくは40～400nmであり、更に好ましくは、50～300nmであり、最も好ましくは70～230nmである。
- [0076] なお、本発明においては、リポソームの物理化学的安定性を向上させるために、リポソーム調製過程又は調製後に、リポソームの内水相及び/又は外水相に、糖類又は多価アルコール類を添加しても良い。特に、長期保存或いは製剤化途上での保管が必要な場合には、リポソームの保護剤として、糖類或いは多価アルコール類を添加・溶解し、凍結乾燥により水分を除いてリン脂質組成物の凍結乾燥物とすることが好ましい。
- [0077] 糖類としては、例えばグルコース、ガラクトース、マンノース、フルクト

ース、イノシトール、リボース、キシロース等の単糖類；サッカロース、ラクトース、セロビオース、トレハロース、マルトース等の二糖類；ラフィノース、メレジトース等の三糖類；シクロデキストリン等のオリゴ糖；デキストリン等の多糖類；キシリトール、ソルビトール、マンニトール、マルチトール等の糖アルコール等が挙げられる。これらの糖類の中では単糖類又は二糖類が好ましく、中でもグルコース又はサッカロースが入手性等の点からより好ましく挙げられる。

[0078] 前記多価アルコール類としては、例えば、グリセリン、ジグリセリン、トリグリセリン、テトラグリセリン、ペンタグリセリン、ヘキサグリセリン、ヘプタグリセリン、オクタグリセリン、ノナグリセリン、デカグリセリン、ポリグリセリン等のグリセリン系化合物；ソルビトール、マンニトール等の糖アルコール系化合物；エチレングリコール、ジエチレングリコール、トリエチレングリコール、テトラエチレングリコール、ペンタエチレングリコール、ヘキサエチレングリコール、ヘプタエチレングリコール、オクタエチレングリコール、ノナエチレングリコール等が挙げられる。このうち、グリセリン、ジグリセリン、トリグリセリン、ソルビトール、マンニトール、分子量400～10,000のポリエチレングリコールが入手性の点から好ましく挙げられる。

[0079] リポソームの内水相及び／又は外水相に含ませる、糖類或いは多価アルコール類の濃度は、リポソーム液に対する重量濃度で、例えば1～20重量%が挙げられ、好ましくは2～10重量%が挙げられる。

[0080] 本発明のペプチド結合リポソームを製造する場合、ペプチドを結合させる前のリポソームを作製した後、ペプチドを結合させることにより簡便に本発明のペプチド結合リポソームを得ることができる。

[0081] 例えば、リン脂質、リポソームの安定化剤及び膜表面にペプチドを結合するための反応性リン脂質を含有したリポソームの懸濁液を調製し、その外水相に前記の糖類の一つであるスクロースを2～10重量%程度加えて溶解する。この糖添加製剤を10mlガラス製バイアルに移して棚段式凍結乾燥機

内に置き、 $-40^{\circ}\text{C}$ 等に冷却して試料を凍結した後、常法により凍結乾燥物を得る。

[0082] ここで得たリポソームの凍結乾燥物は、水分が取り除かれているため長期の保存が可能であり、必要時に特定のペプチドを加えて後の工程を実施することにより、本発明の最終的なペプチド結合リポソームを簡便に迅速に得ることができる。ペプチドとリポソームとの相互作用が強く不安定性が高い場合等は、このようにリポソームの凍結乾燥物の段階で保存し、必要な際にペプチドを結合して用いると非常に簡便である。

[0083] 本発明のペプチド結合リポソームのリポソーム部分を構成するリン脂質膜は、ペプチドが結合したリン脂質を有し得る。ペプチドが結合したリン脂質を含有するリポソームを得る方法としては、次の(A)及び(B)による方法が挙げられる。

(A) リン脂質、反応性リン脂質、リポソームの安定化剤を含有するリポソームを調製し、これにペプチド及び2価反応性化合物を添加し、リポソーム中に含有される反応性リン脂質の官能基と、該ペプチドの官能基とを、2価反応性化合物を介して連結する方法。ここで用いることができる2価反応性化合物は、反応性リン脂質の末端変性体調製において用いたものを同様に用いることができる。具体的には、アルデヒド基を有する2価反応性化合物として、グリオキサール、グルタルアルデヒド、サクシンジアルデヒド、テレフタルアルデヒド等が挙げられる。好ましくは、グルタルアルデヒドが挙げられる。更に、コハク酸イミド基を有する2価反応性化合物として、ジチオビス(サクシンイミジルプロピオネート)、エチレングリコールビス(サクシンイミジルサクシネート)、ジサクシンイミジルサクシネート、ジサクシンイミジルスベレート、又はジサクシンイミジルグルタレート等が挙げられる。また、片末端にサクシンイミド基、もう一方の片末端にマレイミド基を有する2価反応性化合物として、N-サクシンイミジル-4-(p-マレイミドフェニル)ブチレート、スルホサクシンイミジル-4-(p-マレイミドフェニル)ブチレート、N-サクシンイミジル-4-(p-マレイミド

フェニル) アセテート、N-サクシンイミジル-4-(p-マレイミドフェニル) プロピオネート、サクシンイミジル-4-(N-マレイミドエチル)-シクロヘキサン-1-カルボキシレート、スルホサクシンイミジル-4-(N-マレイミドエチル)-シクロヘキサン-1-カルボキシレート、N-( $\gamma$ -マレイミドブチリルオキシ) サクシンイミド、N-( $\epsilon$ -マレイミドカプロイルオキシ) サクシンイミド等を使用することができる。かかる2価反応性化合物を使用すると、官能基としてマレイミド基を有する反応性リン脂質(例えばホスファチジルエタノールアミン)の末端変性体が得られる。

(B) リン脂質、反応性リン脂質、リポソームの安定化剤を含有するリポソームを調製し、これにペプチドを添加し、リポソームに含まれる反応性リン脂質の官能基と、該ペプチドの官能基を連結して結合させる方法。

[0084] 前記(A)及び(B)における結合の種類としては、例えば、イオン結合、疎水結合、共有結合等が挙げられるが、好ましくは共有結合である。更に共有結合の具体例としては、シッフ塩基結合、アミド結合、チオエーテル結合、エステル結合等が挙げられる。

[0085] 以上の2つの方法いずれとも、リポソームを構成するリン脂質膜に含まれる反応性リン脂質にペプチドを結合することができ、リポソームにおいてペプチドを結合したリン脂質が形成される。

[0086] 前記の(A)の方法において、原料となるリポソームとペプチドとを2価反応性化合物を介して結合させる方法の具体例としては、例えば、シッフ塩基結合を利用する方法が挙げられる。シッフ塩基結合を介してリポソームとペプチドとを結合する方法としては、アミノ基を表面に有するリポソームを調製し、ペプチドを該リポソームの懸濁液に添加し、次に、2価反応性化合物としてジアルデヒドを加え、リポソーム表面のアミノ基と該ペプチド中のアミノ基とをシッフ塩基を介して結合する方法を挙げることができる。

[0087] この結合手順の具体例としては、例えば、次の方法が挙げられる。

(A-1) アミノ基を表面に有するリポソームを得るために、不飽和結合を1個有する炭素数14~24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数

14～24の炭化水素基を有する反応性リン脂質（例 ホスファチジルエタノールアミン）をリポソーム原料脂質（リン脂質、リポソームの安定化剤等）中に混合して、アミノ基がリポソーム表面に所定量存在するリポソームを作成する。

（A-2）前記リポソーム懸濁液に、ペプチドを添加する。

（A-3）次に、2価反応性化合物としてグルタルアルデヒドを加えて、所定の時間反応させてリポソームとペプチドとの間にシッフ塩基結合を形成する。

（A-4）その後、余剰のグルタルアルデヒドの反応性を失活させるため、アミノ基含有水溶性化合物としてグリシンをリポソーム懸濁液に加えて反応させる。

（A-5）ゲルろ過、透析、限外ろ過、遠心分離等の方法により、リポソームに未結合のペプチド、グルタルアルデヒドとグリシンとの反応産物、及び余剰のグリシンを除去して、本発明のペプチド結合リポソーム懸濁液を得る。

[0088] 前記の（B）の方法の具体例としては、アミド結合、チオエーテル結合、シッフ塩基結合、エステル結合等を形成することのできる官能基を有する反応性リン脂質を、リポソームを構成するリン脂質膜に導入する方法が挙げられる。このような官能基の具体例としては、サクシンイミド基、マレイミド基、アミノ基、イミノ基、カルボキシル基、水酸基、チオール基等が挙げられる。

[0089] リポソームを構成するリン脂質膜に導入する反応性リン脂質の例としては、前記の不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有する反応性リン脂質（例 ホスファチジルエタノールアミン）のアミノ基末端の末端変性物を用いることができる。

[0090] この結合手順の具体例として、ジアシルホスファチジルエタノールアミンを用いた場合を例にとって、以下説明する。

(B-1) 不飽和結合を1個有する炭素数14~24のアシル基を有するジアシルホスファチジルエタノールアミンとジサクシンイミジルサクシネートを公知の方法で片末端のみ反応させて、官能基としてサクシンイミド基を末端に有するジサクシンイミジルサクシネート結合ジアシルホスファチジルエタノールアミンを得る。

(B-2) 前記ジサクシンイミジルサクシネート結合ジアシルホスファチジルエタノールアミンと他のリポソーム構成成分(リン脂質、リポソームの安定化剤等)とを公知の方法で混合し、表面に官能基としてサクシンイミド基を有するリポソームを作成する。

(B-3) 前記リポソーム懸濁液に、ペプチドを加え、該ペプチド中のアミノ基と、リポソーム表面のサクシンイミド基とを反応させる。

(B-4) 未反応のペプチド、反応副生物等を、ゲルろ過、透析、限外ろ過、遠心分離等の方法により除去して、本発明のペプチド結合リポソームの懸濁液を得る。

[0091] リポソームとペプチドとを結合する場合、官能基として含有されることが多いアミノ基又はチオール基を対象とすることが実用上好ましい。アミノ基を対象とする場合には、サクシンイミド基と反応させることによりシッフ塩基結合を形成させることができる。チオール基を対象とする場合には、マレイミド基と反応させることによりチオエーテル結合を形成させることができる。

[0092] 3. 本発明のペプチド及びペプチド結合リポソームの用途

本発明は、上記本発明のペプチド又は本発明のペプチド結合リポソームを含む細胞傷害性Tリンパ球活性化剤及びエボラウイルスワクチンを提供する。本発明のペプチドやペプチド結合リポソームを用いれば、HLA-A\*0201又はHLA-A\*2402拘束的に、本発明のペプチド又はエピトープペプチドを認識する細胞傷害性Tリンパ球(CTL)を強力に誘導することが可能となる。本発明のペプチドやペプチド結合リポソームにより誘導される細胞傷害性Tリンパ球は、エボラウイルス感染等の結果、HLA-A\*



0201又はHLA-A\*2402上に本発明のペプチド又はエピトープペプチドを提示した細胞を殺傷し、これらの細胞を除去することができる。従って、本発明のペプチドやペプチド結合リポソームは、細胞傷害性Tリンパ球活性化剤やエボラウイルスワクチンとして、エボラウイルス感染や該感染により引き起こされる疾患（エボラ出血熱等）の治療や予防に有用である。

[0093] 本発明のエボラウイルスワクチンが標的とするエボラウイルスの株の種類は、該エボラウイルス感染に対して予防又は治療効果が発揮される限り特に限定されない。エボラウイルスの株としては、ザイール株、スーダン株、レストン株、コートジボアール株、ブンディブギョ株等が挙げられる。配列番号1～14で表されるエピトープ配列は、ザイール株の対応するタンパク質（NP、VP40、GP、L又はVP30）のアミノ酸配列に含まれるので、本発明のエボラウイルスワクチンは、ザイール株に対して特に効果が期待される。また、本発明のエピトープ配列が保存されたザイール株以外のエボラウイルスの株に対しても、ザイール株と同様に、本発明のエボラウイルスワクチンは、優れた効果を発揮することが期待される。各本発明のエピトープ配列が保存されたエボラウイルスの株を以下に列挙する。

配列番号1：ザイール株、スーダン株、コートジボアール株、ブンディブギョ株

配列番号2：ザイール株、スーダン株、レストン株、コートジボアール株、ブンディブギョ株

配列番号3：ザイール株、コートジボアール株、ブンディブギョ株

配列番号4：ザイール株

配列番号5：ザイール株、スーダン株、レストン株、コートジボアール株、ブンディブギョ株

配列番号6：ザイール株

配列番号7：ザイール株

配列番号8：ザイール株、スーダン株、コートジボアール株、ブンディブギョ株

配列番号 9 : ザイール株

配列番号 10 : ザイール株

配列番号 11 : ザイール株、スーダン株、レストン株、コートジボアール株、ブンディブギョ株

配列番号 12 : ザイール株、コートジボアール株

配列番号 13 : ザイール株、コートジボアール株

配列番号 14 : ザイール株

[0094] 更なる局面において、配列番号 15 ~ 23 で表されるエピトープ配列は、ザイール株の L のアミノ酸配列に含まれるので、本発明のエボラウイルスワクチンは、ザイール株に対して特に効果が期待される。また、本発明のエピトープ配列が保存されたザイール株以外のエボラウイルスの株に対しても、ザイール株と同様に、本発明のエボラウイルスワクチンは、優れた効果を発揮することが期待される。各本発明のエピトープ配列が保存されたエボラウイルスの株を以下に列挙する。

配列番号 15 : ザイール株

配列番号 16 : ザイール株、コートジボアール株、ブンディブギョ株

配列番号 17 : ザイール株

配列番号 18 : ザイール株、ブンディブギョ株

配列番号 19 : ザイール株

配列番号 20 : ザイール株

配列番号 21 : ザイール株

配列番号 22 : ザイール株

配列番号 23 : ザイール株

[0095] 上に列挙された株以外であっても、当業者であれば、評価対象のエボラウイルス株において、目的とするエピトープ配列が保存されているか否かを、RT-PCR やダイレクトシーケンシング等の周知のヌクレオチド配列解析方法により、容易に決定することが出来る。

[0096] 本発明のペプチドやペプチド結合リポソームを細胞傷害性 T リンパ球活性

化剤やエボラウイルスワクチンとして使用する場合は、常套手段に従って製剤化することができる。本発明のペプチドやペプチド結合リポソームは低毒性であり、そのまま液剤として、又は適当な剤形の医薬組成物として、ヒト、非ヒト哺乳動物（例、ラット、ウサギ、ヒツジ、ブタ、ウシ、ネコ、イヌ、サル等）、鳥類（ニワトリ、ガチョウ、アヒル、ダチョウ、ウズラ等）等に対して経口的又は非経口的（例、血管内投与、皮下投与等）に投与することができる。本発明のペプチドやペプチド結合リポソームの投与対象は、通常、標的とするエボラウイルスが感染し得る哺乳動物（例、ヒト）であり、好ましくはHLA-A\*0201又はHLA-A\*2402を発現するヒト又はトランスジェニック哺乳動物（例：HHDマウス（Pascolo S, Bervas N, Ure JM, Smith AG, Lemonnier FA, Perarnau B. The Journal of Experimental Medicine 1997; 185(12):2043-2051）等のトランスジェニックマウス）であり、最も好ましくはHLA-A\*0201又はHLA-A\*2402を発現するヒトである。HLA-A\*0201に拘束された細胞傷害性Tリンパ球を誘導し得る本発明のペプチド、又は該ペプチドを含むペプチド結合リポソームを投与する場合、投与対象は、好ましくはHLA-A\*0201を発現するヒト又はトランスジェニック哺乳動物であり、最も好ましくはHLA-A\*0201を発現するヒトである。HLA-A\*2402に拘束された細胞傷害性Tリンパ球を誘導し得る本発明のペプチド、又は該ペプチドを含むペプチド結合リポソームを投与する場合、投与対象は、好ましくはHLA-A\*2402を発現するヒト又はトランスジェニック哺乳動物であり、最も好ましくはHLA-A\*2402を発現するヒトである。本発明のペプチドやペプチド結合リポソームは、通常、非経口的に投与される。

[0097] 本発明の細胞傷害性Tリンパ球活性化剤及びエボラウイルスワクチンは、その有効成分であるペプチド又はペプチド結合リポソーム自体を投与しても良いし、又は適当な医薬組成物として投与しても良い。投与に用いられる医薬組成物としては、上記ペプチド又はペプチド結合リポソームと薬理的に許容され得る担体、希釈剤又は賦形剤とを含むものであっても良い。このよ

うな医薬組成物は、経口又は非経口投与に適する剤形として提供される。

[0098] 非経口投与のための組成物としては、例えば、注射剤、坐剤等が用いられ、注射剤は静脈注射剤、皮下注射剤、皮内注射剤、筋肉注射剤、点滴注射剤等の剤形を包含しても良い。このような注射剤は、公知の方法に従って調製できる。注射剤の調製方法としては、例えば、上記ペプチド又はペプチド結合リポソームを通常注射剤に用いられる無菌の水性溶媒に溶解又は懸濁することによって調製できる。注射用の水性溶媒としては、例えば、蒸留水；生理的食塩水；リン酸緩衝液、炭酸緩衝液、トリス緩衝液、酢酸緩衝液等の緩衝液等が使用できる。このような水系溶媒のpHは5～10が挙げられ、好ましくは6～8である。調製された注射液は、適当なアンプルに充填されることが好ましい。

[0099] また、本発明のペプチドの溶解液又は本発明のペプチド結合リポソームの懸濁液を、真空乾燥、凍結乾燥等の処理に付すことにより、本発明のペプチド又は本発明のペプチド結合リポソームの粉末製剤を調製することもできる。本発明のペプチド又は本発明のペプチド結合リポソームを粉末状態で保存し、使用時に該粉末を注射用の水系溶媒で分散することにより、使用に供することができる。

[0100] 本発明の細胞傷害性Tリンパ球活性化剤及びエボラウイルスワクチンは、その効果を増強するため、アジュバントをさらに含有してもよい。アジュバントとしては、水酸化アルミニウムゲル、完全フロイントアジュバント、不完全フロイントアジュバント、百日咳菌アジュバント、ポリ(I, C)、CpG-DNA等が挙げられるが、CpG-DNAがとりわけ好ましい。CpG-DNAは細菌の非メチル化CpGモチーフを含むDNAであり、特定の受容体(Toll-like receptor 9)のリガンドとしてはたらくことが知られている(詳細はBiochim. Biophys. Acta 1489, 107-116 (1999)及びCurr. Opin. Microbiol. 6, 472-477 (2003)参照)。CpG-DNAは樹状細胞(DC)を活性化することにより、本発明のペプチド又はペプチド結合リポソームによる細胞傷害性Tリンパ球の誘導を増強することができる。

[0101] 医薬組成物中の有効成分（本発明のペプチド又はペプチド結合リポソーム）の含有量は、通常、医薬組成物全体の約0.1～100重量%、好ましくは約1～99重量%、さらに好ましくは約10～90重量%程度である。

[0102] 本発明の細胞傷害性Tリンパ球活性化剤又はエボラウイルスワクチンがアジュバントを含む場合、該アジュバント（例えばCpG-DNA）の含有量は、細胞傷害性Tリンパ球の誘導を増強し得る範囲で適宜設定することができるが、通常、医薬組成物全体の約0.01～10重量%、好ましくは約0.1～5重量%程度である。

[0103] 本発明のペプチド又は本発明のペプチド結合リポソームの投与量は、投与する対象、投与方法、投与形態等によって異なるが、例えば、皮下投与或いは経鼻投与により生体内の細胞傷害性Tリンパ球を活性化する場合には、通常成人1人（体重60kg）あたり本発明のペプチドとして一回当たり1 $\mu$ g～1000 $\mu$ gの範囲、好ましくは20 $\mu$ g～100 $\mu$ gの範囲で、通常4週間から18ヶ月に亘って、2回から3回投与する。また、皮下投与によりエボラウイルス感染を予防する場合には、本発明のペプチドとして一回当たり1 $\mu$ g～1000 $\mu$ gの範囲、好ましくは20 $\mu$ g～100 $\mu$ gの範囲で、通常4週間から18ヶ月に亘って、2回から3回投与する。更に、皮下投与によりエボラウイルス感染に起因する疾患（例、エボラ出血熱）を治療する場合には、本発明のペプチドとして一回当たり1 $\mu$ g～1000 $\mu$ gの範囲、好ましくは20 $\mu$ g～100 $\mu$ gの範囲で、通常4週間から18ヶ月に亘って、2回から3回投与する。

[0104] 以下、実施例により本発明をより詳細に説明するが、本発明はこれらの実施例により何ら限定されるものではない。

## 実施例

[0105] [参考例1]

リポソームの調製

1) 脂質混合粉末の調製

末端変性ホスファチジルエタノールアミンからなる反応性リン脂質（サク

シンイミジル基-ジオレオイルホスファチジルエタノールアミン) の合成

ジオレオイルホスファチジルエタノールアミン2g及びトリエチルアミン180  $\mu$ lをクロロホルム50mlに溶解及び添加し、300ml容の4つ口フラスコに入れた。このフラスコをマグネットスタラーで室温で攪拌しつつ、別に調製した2価反応性化合物であるジサクシンイミジルスベレート3gをクロロホルム80mlに溶解した溶液を、常法に従って4時間に亘って滴下し、ジオレオイルホスファチジルエタノールアミンのアミノ基にジサクシンイミジルスベレートの片末端を反応させた。この粗反応溶液をナス型フラスコに移し、エバポレータによって溶媒を留去した。次に、このフラスコに粗反応物を溶解できるだけのクロロホルムを少量加えて高濃度粗反応物溶液を得、クロロホルム/メタノール/水 (65/25/1、体積比) で平衡化したシリカゲルを用いて常法に従ってカラムクロマトグラフィーを行い、目的のジオレオイルホスファチジルエタノールアミンのアミノ基にジサクシンイミジルスベレートの片末端が結合した画分のみを回収し、溶媒を留去して目的の反応性リン脂質であるサクシンイミド基-ジオレオイルホスファチジルエタノールアミンを得た。

## 2) 脂質混合粉末の調製

ジオレオイルホスファチジルコリン1.3354g (1.6987mmol)、前項で調製したサクシンイミド基-ジオレオイルホスファチジルエタノールアミン0.2886g (0.2831mmol)、コレステロール0.7663g (1.9818mmol) 及びジオレオイルホスファチジルグリセロールNa塩0.4513g (0.5662mmol) をナス型フラスコに取り、クロロホルム/メタノール/水 (65/25/4、容量比) 混合溶剤50mlを入れ、40°Cにて溶解した。次にロータリーエバポレーターを使用して減圧下で溶剤を留去し、脂質の薄膜を作った。更に注射用蒸留水を30ml添加し、攪拌して均一のスラリーを得た。このスラリーを凍結させ、凍結乾燥機にて24時間乾燥させ脂質混合粉末を得た。

## 3) リポソームの調製

次に、別途作製した緩衝液 (1.0mM  $\text{Na}_2\text{HPO}_4/\text{KH}_2\text{PO}_4$ 、0.25M サッカロース、pH7.4、以後緩衝液と略す) 60mlを上記脂質混合粉末の入ったナス型フラスコ

内に入れ、40℃にて攪拌しながら脂質を水和させ、リポソームを得た。次にエクストルーダーを用いてリポソームの粒径を調整した。まず8 $\mu$ mのポリカーボネートフィルターを通過させ、続いて5 $\mu$ m、3 $\mu$ m、1 $\mu$ m、0.65 $\mu$ m、0.4 $\mu$ m及び0.2 $\mu$ mの順にフィルターを通過させた。リポソーム粒子の平均粒径206nm（動的光散乱法による測定）が得られた。

[0106] [実施例1]

CTLエピトープの検索

エボラウイルス（ザイール株）polyproteinのアミノ酸配列から、モチーフ配列等に基づき、HLA-A\*0201拘束性CTLのエピトープの候補を94種類選択した。これらのエピトープからなるペプチド（9アミノ酸長）について、以下の方法によりHLA-A\*0201に対する結合性を評価した。

[0107] RMA-S-HHD細胞を26℃にて終夜インキュベートした。その後、RMA-S-HHD細胞を、種々の濃度の評価対象のペプチドと共に、37℃で3時間インキュベートした。細胞を回収し、コンフォメーション感受性の抗HLA-A\*0201モノクローナル抗体（BB7.2）（1次抗体）にて処理し、引き続きFITC標識した2次抗体で染色した後、フローサイトメトリーによりHLA-A\*0201の発現を解析した。RMA-S-HHD細胞は、TAPを欠損しているため、26℃において、自己ペプチドが結合していない空の（empty）HLA-A\*0201を安定に発現する。一方、37℃では、ペプチドが結合していない空の（empty）HLA-A\*0201は不安定であり、BB7.2はこれを認識できないため、評価対象のペプチド存在下で37℃にてインキュベートした後のHLA-A\*0201の発現をBB7.2にて解析することにより、評価対象のペプチドのHLA-A\*0201への結合性を評価することができる。

[0108] 各ペプチドについてBL<sub>50</sub>（ $\mu$ M）を算出した。BL<sub>50</sub>は、26℃にて14～16時間インキュベートしたRMA-S-HHD細胞の半最大MFI（half-maximal MFI）を与える各ペプチドの濃度を意味する。結果を表1に示す。

[0109] [表1]

Peptides	BL50
NP-A	66.3
NP-B	85.5
NP-C	352.7
NP-D	178.9
NP-E	251.5
NP-56	116.4
NP-401	129.9
NP-F	410.9
NP-G	90.3
NP-H	144.1
NP-I	127.3
NP-J	196.7
NP-K	93.4

Peptides	BL50
VP35-A	311.2
VP35-B	53.6
VP35-C	139.4
VP35-D	-2224.7
VP35-E	112.4
VP35-F	90.7
VP35-G	600.3
VP35-H	106.3
VP35-a	84.7
VP35-I	157

Peptide	BL50
VP40-A	139
VP40-73	322.7
VP40-B	223.7
VP40-C	-1998

Peptide	BL50
GP-A	145.6
GP-B	126.1
GP-25	152.4
GP-160	55
GP-C	3500.7
GP-D	150.1
GP-252	72.5
GP-E	128.3
GP-F	3561.7
GP-546	138

Peptide	BL50
VP30-a	349.9
VP30-94	113.2
VP30-b	633.1

Peptide	BL50
VP24-A	78.7
VP24-B	191.5
VP24-C	142.5
VP24-D	168
VP24-E	-362.4
VP24-F	233.6
VP24-a	219.2
VP24-G	1055.5
VP24-H	340.9

Peptide	BL50
L-A	178.6
L-B	122.7
L-C	100.2
L-D	89.7
L-E	45.3
L-F	63.5
L-G	-80.1
L-H	214
L-I	57.3
L-1955	106.7
L-J	191.5
L-293	113.3
L-K	101.2
L-a	3570.1
L-L	-161.2
L-M	388.1
L-b	69.2
L-c	95.7
L-209	91.8
L-N	149.7
L-O	189.9
L-1099	195.2
L-P	76.5

Peptide	BL50
L-Q	108.6
L-R	238.1
L-S	1295
L-T	231.3
L-d	5590.3
L-771	98.4
L-e	540.6
L-U	93
L-V	113.4
L-W	224.5
L-X	157.9
L-Y	84.2
L-Z	116.5
L-A-A	162.2
L-A-B	100.2
L-932	93.1
L-f	218.9
L-A-C	63.4
L-A-D	99.5
L-A-E	161.1
L-A-F	118
L-A-G	51.5

[0110] [実施例2]

エボラウイルス特異的CD8+ / IFN-γ+ T細胞誘導能の評価



実施例1に記載した94種類のエピトープペプチドについて、エボラウイルス特異的CD8<sup>+</sup>/IFN- $\gamma$ <sup>+</sup>T細胞誘導能を評価した。

評価対象のペプチド(10 $\mu$ M)でパルスした2 $\times$ 10<sup>7</sup>個の同種同系脾臓細胞で、HHDマウスを免疫した。HHDマウスにおいては、マウス固有のMHCクラスI遺伝子であるH-2D、及びマウス $\beta$ 2-microglobulin遺伝子がノックアウトされ、ヒトのHLA-A\*0201及びヒト $\beta$ 2-microglobulin遺伝子が導入され発現している(Pascolo S, Bervas N, Ure JM, Smith AG, Lemonnier FA, Perrarnau B. The Journal of Experimental Medicine 1997; 185(12):2043-2051)。1週間後、免疫したマウスからの脾臓細胞を、10 $\mu$ Mの対応する評価対象のペプチドと共に、ブレフェルジンAの存在下、5時間、CO<sub>2</sub>インキュベーター中でインキュベートした。

細胞を回収し、細胞上のFcレセプターをブロックするために抗マウスCD16/CD32モノクローナル抗体を加え、FITC標識抗マウスCD8 $\alpha$ モノクローナル抗体で染色した。細胞を固定し、透過処理し、PE標識抗マウスIFN- $\gamma$ モノクローナル抗体でさらに染色した後、フローサイトメトリーにより解析した。CD8<sup>+</sup>/IFN- $\gamma$ <sup>+</sup>T細胞の割合の増加により、CTL誘導能を評価した。

[0111] 評価した94種類のエピトープペプチドのうち、図1に示す24種類のエピトープペプチドが各エピトープに特異的なCTLを誘導した。

[0112] [実施例3]

ペプチド結合リポソームのエボラウイルス特異的CD8<sup>+</sup>/IFN- $\gamma$ <sup>+</sup>T細胞誘導能の評価

1) ペプチド結合リポソーム製剤の調製

実施例2においてCTL誘導活性を示した24種類のエピトープペプチドを用いて、ペプチド結合リポソームを以下の方法により調製した。

参考例1(リポソームの調製)のリポソーム1.5mlを試験管に採取し、別に調製した3mlの各ペプチドプール溶液を加えた後、5 $^{\circ}$ Cで48時間穏やかに攪拌し反応させた。この反応液を、緩衝液で平衡化したSepharoseCL

-4Bを用いて常法に従ってゲル濾過した。尚、リポソーム画分は白濁しているので、目的画分は容易に確認できるが、UV検出器等で確認しても良い。

得られたリポソーム懸濁液中のリン濃度を測定し（リン脂質テストWako）、リン脂質由来のリン濃度を2 mMになるように濃度を緩衝液で希釈調整し、各ペプチド結合リポソームの懸濁液を得た。

[0113] 2) エボラウイルス特異的CD8<sup>+</sup>/IFN- $\gamma$ <sup>+</sup>T細胞誘導能の評価

CpGと共に、評価対象のペプチド結合リポソームでHHDマウスを免疫した。1週間後、免疫したマウスからの脾臓細胞を、10  $\mu$ Mの対応する評価対象のペプチドと共に、ブレフェルジンAの存在下、5時間、CO<sub>2</sub>インキュベーター中でインキュベートした。

細胞を回収し、細胞上のFcレセプターをブロックするために抗マウスCD16/CD32モノクローナル抗体を加え、FITC標識抗マウスCD8 $\alpha$ モノクローナル抗体で染色した。細胞を固定し、透過処理し、PE標識抗マウスIFN- $\gamma$ モノクローナル抗体でさらに染色した後、フローサイトメトリーにより解析した。CD8<sup>+</sup>/IFN- $\gamma$ <sup>+</sup>T細胞の割合の増加により、CTL誘導能を評価した。

[0114] 評価した24種類のエピトープペプチドのうち、以下の14種類のエピトープペプチドを用いて調製したペプチド結合リポソームが、有意にCTLを誘導した。

NP-56：配列番号1で表されるアミノ酸配列からなるペプチド。

NP-401：配列番号2で表されるアミノ酸配列からなるペプチド。

VP40-73：配列番号3で表されるアミノ酸配列からなるペプチド。

GP-25：配列番号4で表されるアミノ酸配列からなるペプチド。

GP-160：配列番号5で表されるアミノ酸配列からなるペプチド。

GP-252：配列番号6で表されるアミノ酸配列からなるペプチド。

GP-546：配列番号7で表されるアミノ酸配列からなるペプチド。

VP30-94：配列番号8で表されるアミノ酸配列からなるペプチド。

L-209：配列番号9で表されるアミノ酸配列からなるペプチド。

L-293 : 配列番号10で表されるアミノ酸配列からなるペプチド。

L-771 : 配列番号11で表されるアミノ酸配列からなるペプチド。

L-932 : 配列番号12で表されるアミノ酸配列からなるペプチド。

L-1099 : 配列番号13で表されるアミノ酸配列からなるペプチド。

L-1955 : 配列番号14で表されるアミノ酸配列からなるペプチド。

[0115] これら14種類のエピトープペプチドに関する結果を図2に示す。特に、NP-56、L-293及びL-209のCTL誘導能が強力であった。VP40-73、GP-160及びGP-252は、2回免疫した場合に、強力でCTLを誘導した。

[0116] [実施例4]

インビボにおけるCTL活性誘導能の評価

HHDマウスを、リポソームに結合したそれぞれの評価対象のペプチド (0.5  $\mu\text{g}/\mu\text{l}$ を100  $\mu\text{l}$ /匹) 及びCpG5002 (Vaccine 25, 4914-4921 (2007)参照) (5  $\mu\text{g}$ /匹) で1回免疫した。免疫7日後に、別のナイーブなHHDマウスから脾細胞を調製した。2  $\times$  10<sup>8</sup>個の脾細胞を2 mlのRPMI 1640にサスペンドし、そのサスペンションを1 mlずつ2本のチューブに分けた。片方のチューブに免疫に使用したペプチド (10  $\mu\text{M}$ ) を加え、37°Cで1時間インキュベートすることにより、脾細胞を該ペプチドでパルスした。脾細胞を遠心分離し、上清を除いた。脾細胞を10 mlのT10により1回洗浄し、遠心分離し、上清を除いた。脾細胞のペレットに20 mlのPBS/0.1%BSAを加え、素早くボルテックスすることにより脾細胞を再分散した。脾細胞の分散液に5 mMのCFSEを10  $\mu\text{l}$ 加え (最終濃度: 2.5  $\mu\text{M}$ )、素早くボルテックスし、37°Cで10分間インキュベートすることにより、ペプチドでパルスした脾細胞を濃い蛍光色素 (CFSE) で標識した。もう片方のチューブにはペプチドを加えないで、薄い蛍光色素 (CFSE) (最終濃度: 0.25  $\mu\text{M}$ ) で標識した。双方の脾細胞を遠心分離し、上清を除いた。洗浄した脾細胞に10 mlのR10を加え、遠心分離し、上清を除いた。双方の脾細胞をそれぞれHBSS (又は血清不含RPMI) に再懸濁し、

$5 \times 10^7$ 個/mlの濃度に調整した。この2グループの細胞懸濁液を同体積混ぜて、免疫したマウスの静脈内に注射することにより、脾細胞を移入 ( $1 \times 10^7$ 個/匹) した。翌日 (移入から4~12時間後)、マウスを安楽殺した後脾臓を回収して、その中の濃い蛍光色素 (CFSE)  $2.5 \mu\text{M}$  で標識した標的細胞の減少率をフローサイトメーターにより解析した。

[0117] 図3に示されるように、いずれのペプチド結合リポソームも、インビボにおいて各エピトープに特異的なCTL活性を誘導した。特に、NP-56、NP-401、VP40-73、GP-160、GP-252、L-1955、L-293、L-209、L-1099、L-771及びVP30-94の誘導能が強力であった。

[0118] [実施例5]

エボラウイルス特異的CD8<sup>+</sup>/IFN- $\gamma$ <sup>+</sup>T細胞誘導能の評価

エボラウイルス (ザイール株) polyproteinのアミノ酸配列から、モチーフ配列等に基づき、HLA-A\*2402拘束性CTLのエピトープの候補を27種類選択した。これらのエピトープからなるペプチド (9又は10アミノ酸長) について、エボラウイルス特異的CD8<sup>+</sup>/IFN- $\gamma$ <sup>+</sup>T細胞誘導能を評価した。

評価対象のペプチド ( $10 \mu\text{M}$ ) でパルスした  $2 \times 10^7$  個の同種同系脾臓細胞で、A24Tgマウスを免疫した。A24Tgマウスにおいては、マウス固有のMHCクラスI遺伝子であるH-2D及びH-2K、並びにマウス  $\beta 2$ -microglobulin遺伝子がノックアウトされ、ヒトのHLA-A\*2402、ヒト  $\beta 2$ -microglobulin、及びヒトCD8遺伝子が導入され発現している (J. Immunol 1993 vol150, 3681-3689; J Exp Med. 1995 Nov 1;182(5):1315-25; Tissue Antigens. 1989 Jul;34(1):50-63.)。1週間後、免疫したマウスからの脾臓細胞を、 $10 \mu\text{M}$ の対応する評価対象のペプチドと共に、ブレフェルジンAの存在下、5時間、CO<sub>2</sub>インキュベーター中でインキュベートした。

細胞を回収し、細胞上のFcレセプターをブロックするために抗マウスCD16/CD32モノクローナル抗体を加え、FITC標識抗マウスCD8

$\alpha$ モノクローナル抗体で染色した。細胞を固定し、透過処理し、PE標識抗マウスIFN- $\gamma$ モノクローナル抗体でさらに染色した後、フローサイトメトリーにより解析した。CD8<sup>+</sup>/IFN- $\gamma$ <sup>+</sup>T細胞の割合の増加により、CTL誘導能を評価した。各ペプチドで刺激した際に誘導されたCD8<sup>+</sup>/IFN- $\gamma$ <sup>+</sup>T細胞の割合(%)を表2に示す。

[0119] [表2]

	ペプチド(-)	ペプチド(+)		ペプチド(-)	ペプチド(+)
L-1087	0.08	1.08	L-B-D	0.09	0.43
L-105	0.08	1.13	L-B-E	0.03	0.29
L-1943	0.09	1.34	L-B-F	0.07	0.37
L-1359	0.15	1.26	NP-B-A	0.37	0.58
L-2000	0.15	3.51	VP40-B-A	0.36	0.58
L-407	0.54	3.26	L-B-G	0.55	0.93
L-B-A	0.30	1.60	L-B-H	0.69	1.04
L-1939	0.09	1.01	L-B-I	0.15	0.35
L-1847	0.15	1.03	L-B-J	0.15	0.36
L-2046	0.15	1.01	L-B-K	0.38	0.71
L-B-B	0.55	1.07	L-B-L	0.38	0.60
GP-B-A	0.10	0.34	L-B-M	0.38	0.75
GP-B-B	0.10	0.54	L-B-N	0.38	1.04
L-B-C	0.12	0.32			

[0120] 評価した27種類のエピトープペプチドのうち、下記の表3に示す9種類のエピトープペプチドが各エピトープに特異的なCTLを強力に誘導した。

[0121]

[表3]

名前	部位	アミノ酸配列
L-105	105 - 113	KYTMQDALF (配列番号 15)
L-407	407 - 415	TYCVFKYSI (配列番号 16)
L-1087	1087 - 1095	SYLDHCDNI (配列番号 17)
L-1359	1359 - 1367	QYLYTSTL (配列番号 18)
L-1847	1847 - 1855	KYQVKTLFF (配列番号 19)
L-1939	1939 - 1947	LYEAVYKLI (配列番号 20)
L-1943	1943 - 1951	VYKLILHHI (配列番号 21)
L-2000	2000 - 2008	WYLCLTNFL (配列番号 22)
L-2046	2046 - 2054	QYADCELHL (配列番号 23)

## [0122] [実施例6]

ペプチド結合リポソームのエボラウイルス特異的CD8<sup>+</sup>/IFN- $\gamma$ <sup>+</sup>T細胞誘導能の評価

## 1) ペプチド結合リポソーム製剤の調製

実施例5において強力的にCTL誘導活性を示した9種類のエピトープペプチドを用いて、ペプチド結合リポソームを実施例3 1)と同様に調製した。

[0123] 2) エボラウイルス特異的CD8<sup>+</sup>/IFN- $\gamma$ <sup>+</sup>T細胞誘導能の評価

CpGと共に、評価対象のペプチド結合リポソームでA24Tgマウスを1週間毎に3回免疫した。最終免疫から7日後、免疫したマウスからの脾臓細胞を、10 $\mu$ Mの対応する評価対象のペプチドと共に、ブレフェルジンAの存在下、5時間、CO<sub>2</sub>インキュベーター中でインキュベートした。

細胞を回収し、細胞上のFcレセプターをブロックするために抗マウスCD16/CD32モノクローナル抗体を加え、FITC標識抗マウスCD8 $\alpha$ モノクローナル抗体で染色した。細胞を固定し、透過処理し、PE標識抗マウスIFN- $\gamma$ モノクローナル抗体でさらに染色した後、フローサイトメトリーにより解析した。CD8<sup>+</sup>/IFN- $\gamma$ <sup>+</sup>T細胞の割合の増加により、CTL誘導能を評価した。

[0124] 評価した9種類のエピトープペプチドを用いて調製したペプチド結合リポソームのいずれもが、有意にCTLを誘導した(図4)。特に、L-105、L-407、L-1087、L-1939、L-1943及びL-2000のCTL誘導能が強力であった。

[0125] [実施例7]

インビボにおけるCTL活性誘導能の評価

HHDMマウスに替えてA24Tgマウスを用いることを除き、実施例4と同様に、リポソームに結合したそれぞれの評価対象のペプチド(実施例5において選択した9種類のエピトープペプチド)についてインビボにおけるCTL活性誘導能を評価した。

[0126] 図5に示されるように、いずれのペプチド結合リポソームも、インビボにおいて各エピトープに特異的なCTL活性を誘導した。特に、特に、L-105、L-407、L-1087、L-1847、L-1943及びL-2000の誘導能が強力であった。

### 産業上の利用可能性

[0127] 本発明のペプチド又はペプチド結合リポソームを用いれば、エボラウイルスに対する細胞傷害性Tリンパ球を効率よく誘導することができ、エボラウイルス感染に対する優れた治療又は予防効果が期待できる。

本出願は、日本で出願された特願2010-231918(出願日:2010年10月14日)を基礎としており、その内容は本明細書に全て包含されるものである。

## 請求の範囲

- [請求項1] ペプチドが結合したリポソームであって、  
該ペプチドが、  
(1) エボラウイルス抗原タンパク質のアミノ酸配列に含まれる連続する9アミノ酸長の部分配列、又は  
(2) (1)のアミノ酸配列において、1又は2個のアミノ酸が置換されたアミノ酸配列  
を含み、且つ  
9～11アミノ酸の長さを有する、  
HLA-A\*0201又はHLA-A\*2402に拘束された細胞傷害性Tリンパ球を誘導し得るエボラウイルス抗原ペプチドであり；  
該リポソームが、不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有するリン脂質、及びリポソームの安定化剤を含有し；且つ  
該リポソームの表面に該ペプチドが結合している、  
ペプチド結合リポソーム。
- [請求項2] リン脂質が、不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基を有するリン脂質である、請求項1記載のペプチド結合リポソーム。
- [請求項3] アシル基がオレオイル基である、請求項1又は2に記載のペプチド結合リポソーム。
- [請求項4] リン脂質が、ジアシルホスファチジルセリン、ジアシルホスファチジルグリセロール、ジアシルホスファチジン酸、ジアシルホスファチジルコリン、ジアシルホスファチジルエタノールアミン、サクシンイミジル—ジアシルホスファチジルエタノールアミン、及びマレイミド—ジアシルホスファチジルエタノールアミンから選ばれる少なくとも1つである、請求項1～3のいずれか1項に記載のペプチド結合リポソーム。
- [請求項5] リポソームの安定化剤がコレステロールである、請求項1～4のい



ずれか1項に記載のペプチド結合リポソーム。

[請求項6] ペプチドが、リポソームを構成するリン脂質膜に含まれる不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有するリン脂質に結合している、請求項1～5のいずれか1項に記載のペプチド結合リポソーム。

[請求項7] リポソームが以下の組成を有する、請求項1～6のいずれか1項に記載のペプチド結合リポソーム：

(A) 不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有するリン脂質 1～99.8モル%；

(B) リポソームの安定化剤 0.2～75モル%。

[請求項8] リポソームが以下の組成を有する、請求項1～7のいずれか1項に記載のペプチド結合リポソーム：

(I) 不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有する酸性リン脂質 1～85モル%；

(II) 不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有する中性リン脂質 0.01～80モル%；

(III) ペプチドが結合した、不飽和結合を1個有する炭素数14～24のアシル基又は不飽和結合を1個有する炭素数14～24の炭化水素基を有するリン脂質 0.2～80モル%；

(IV) リポソームの安定化剤 0.2～75モル%。

[請求項9] エボラウイルス抗原タンパク質が、Nucleoprotein、virion structural protein 40、Glycoprotein、virion structural protein 30及びRNA-dependent RNA polymeraseからなる群から選択されるいずれかである、請求項1

～8のいずれか1項に記載のペプチド結合リポソーム。

[請求項10] 部分配列が、配列番号1～23のいずれかで表されるアミノ酸配列である、請求項1～9のいずれか1項に記載のペプチド結合リポソーム。

[請求項11] HLA-A\*0201に拘束された細胞傷害性Tリンパ球を誘導し得るペプチドであって、

(1) 配列番号1～14のいずれかで表されるアミノ酸配列、又は  
(2) 配列番号1～14のいずれかで表されるアミノ酸配列において、1又は2個のアミノ酸が置換されたアミノ酸配列を含み、且つ9～11アミノ酸の長さを有する、ペプチド。

[請求項12] HLA-A\*2402に拘束された細胞傷害性Tリンパ球を誘導し得るペプチドであって、

(1) 配列番号15～23のいずれかで表されるアミノ酸配列、又は  
(2) 配列番号15～23のいずれかで表されるアミノ酸配列において、1又は2個のアミノ酸が置換されたアミノ酸配列を含み、且つ9～11アミノ酸の長さを有する、ペプチド。

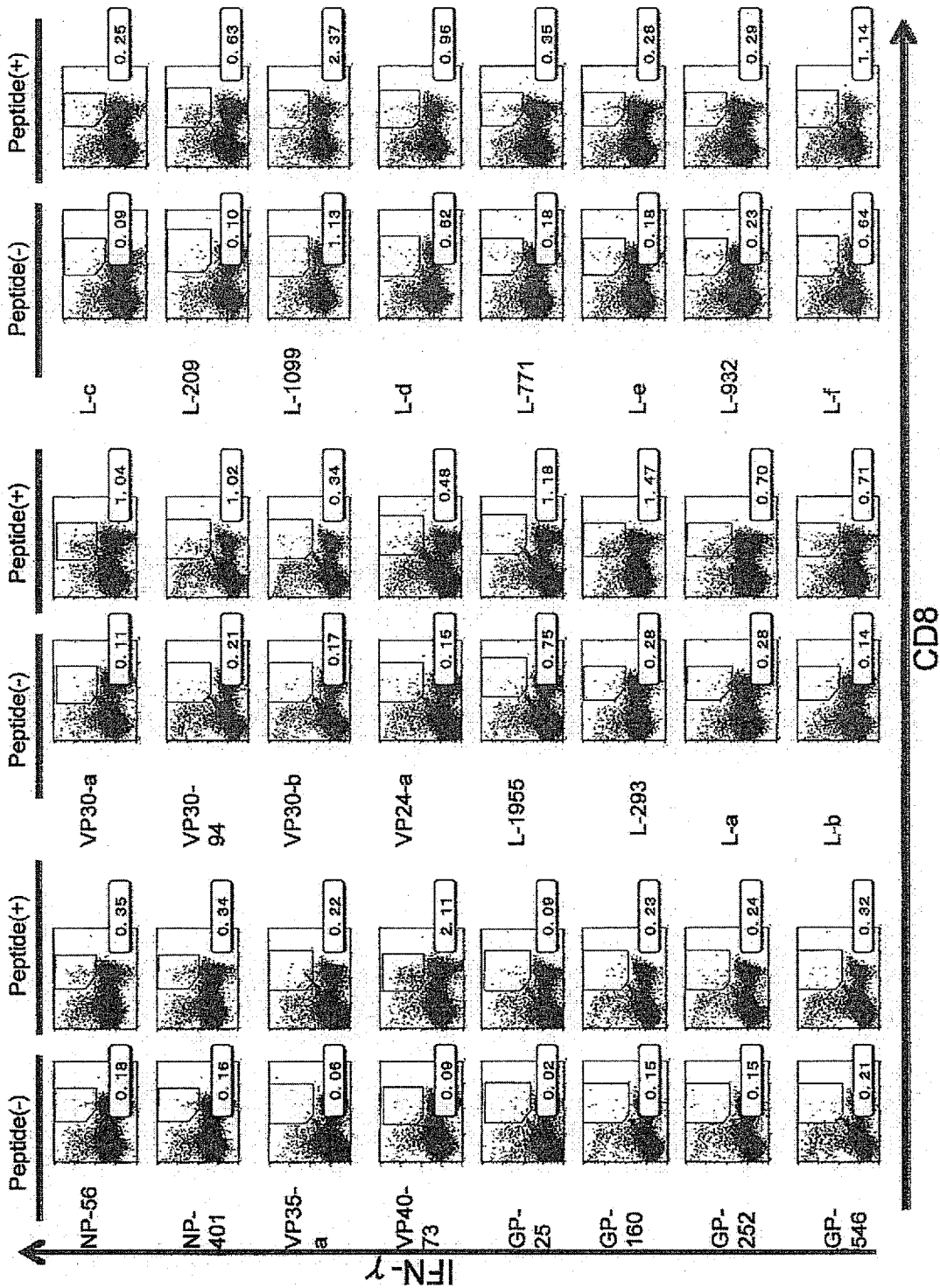
[請求項13] 請求項1～10のいずれか1項に記載のペプチド結合リポソーム、或いは請求項11又は12記載のペプチドを含む、細胞傷害性Tリンパ球活性化剤。

[請求項14] 更にアジュバントを含有することを特徴とする、請求項13記載の細胞傷害性Tリンパ球活性化剤。

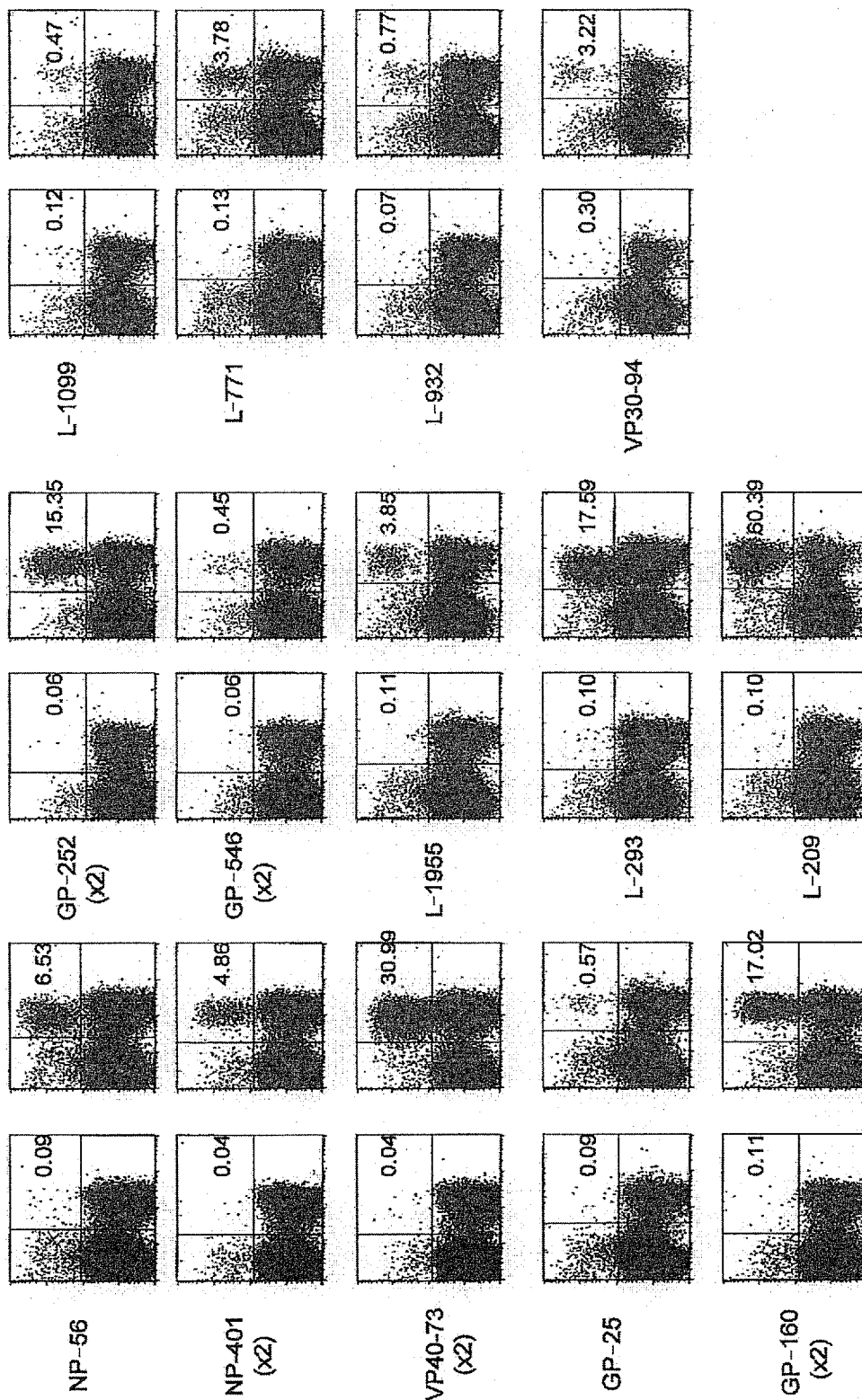
[請求項15] 請求項1～10のいずれか1項に記載のペプチド結合リポソーム、或いは請求項11又は12記載のペプチドを含む、エボラウイルスワクチン。

[請求項16] 更にアジュバントを含有することを特徴とする、請求項15記載のエボラウイルスワクチン。

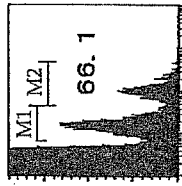
[ 1 ]



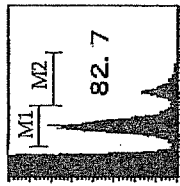
[2]



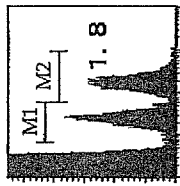
[ 3 ]



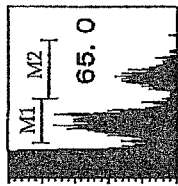
L-1099



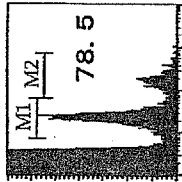
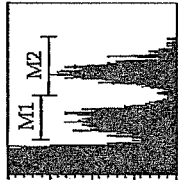
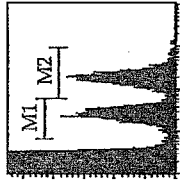
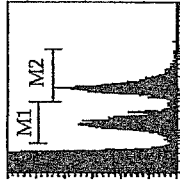
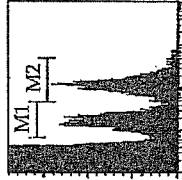
L-771



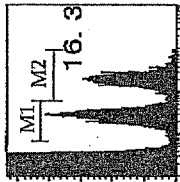
L-932



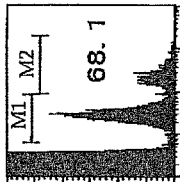
VP30-94



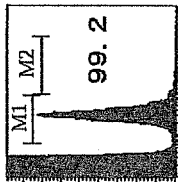
GP-252



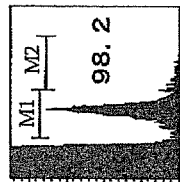
GP-546



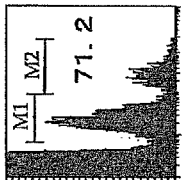
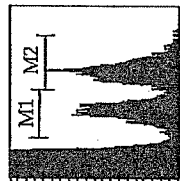
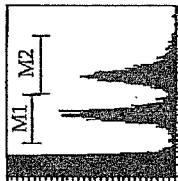
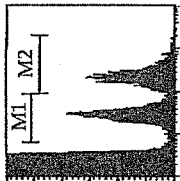
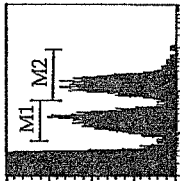
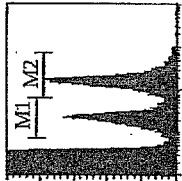
L-1955



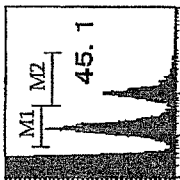
L-293



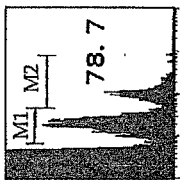
L-209



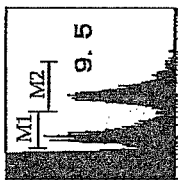
NP-56



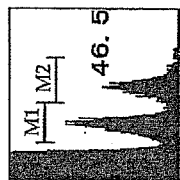
NP-401



VP40-73

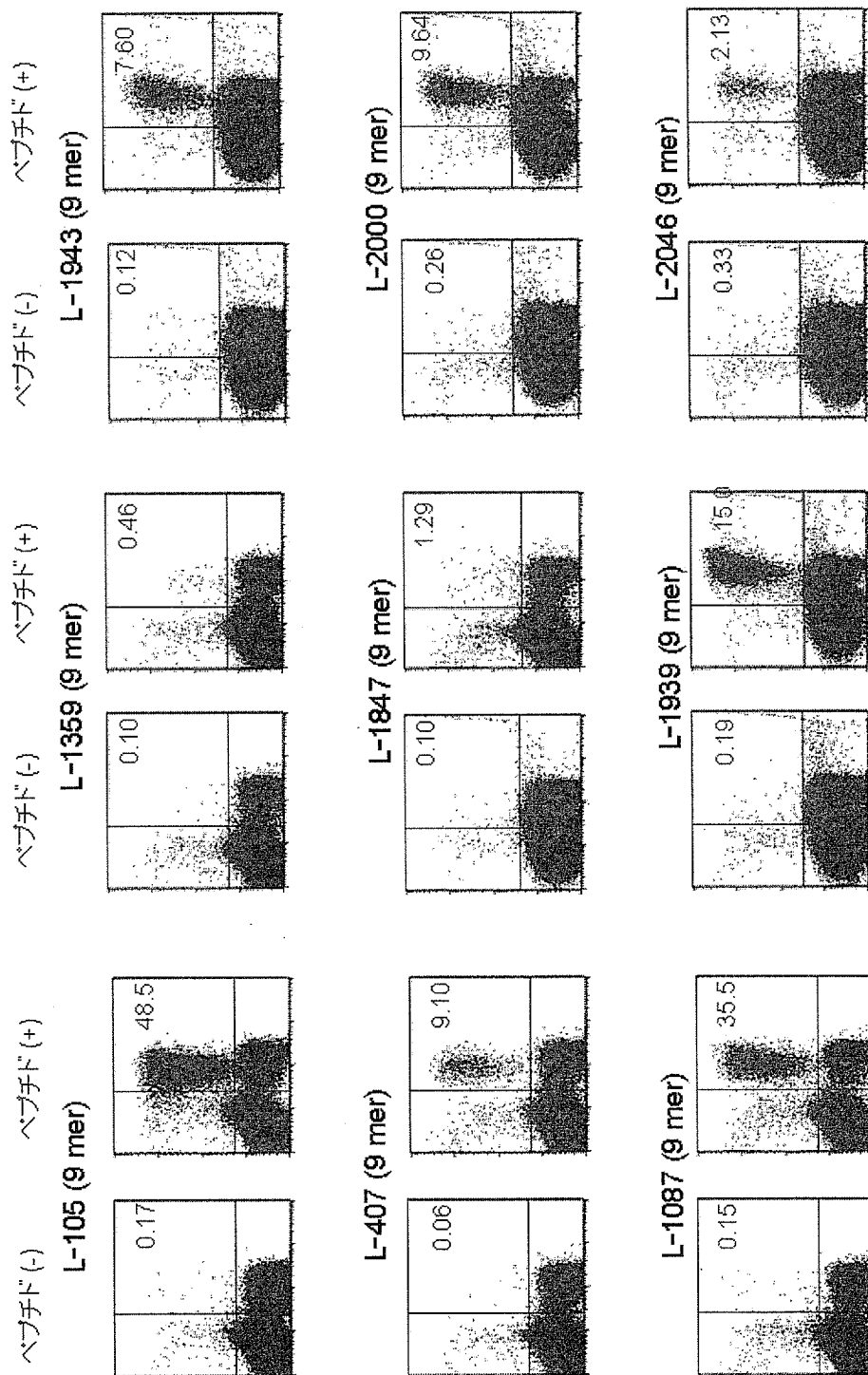


GP-25

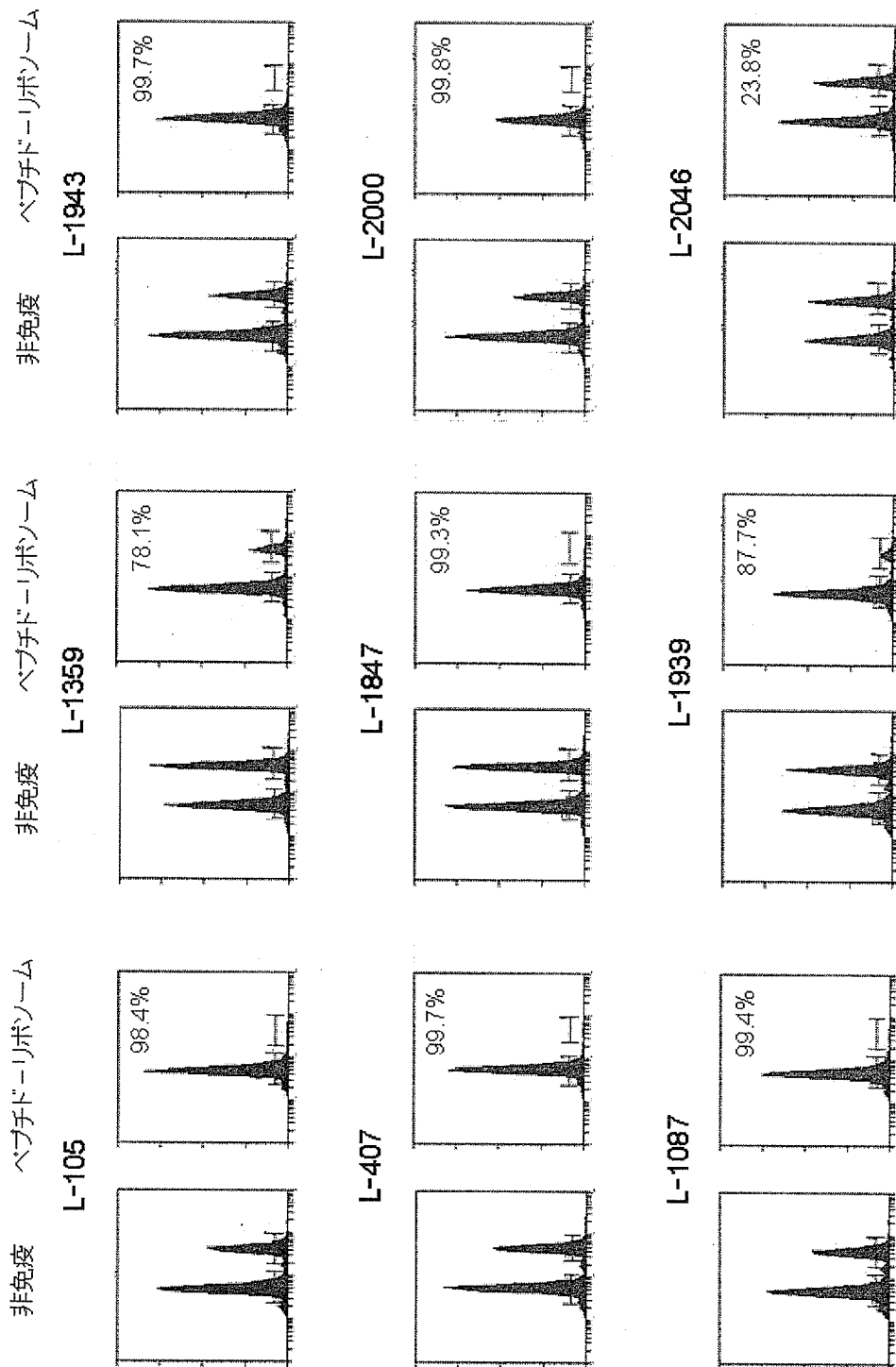


GP-160

[図4]



[図5]



## INTERNATIONAL SEARCH REPORT

International application No.

PCT/JP2011/073686

<b>A. CLASSIFICATION OF SUBJECT MATTER</b> C07K7/06(2006.01)i, A61K9/127(2006.01)i, A61K38/00(2006.01)i, A61K39/12(2006.01)i, A61K47/24(2006.01)i, A61K47/28(2006.01)i, A61P31/14(2006.01)i, A61P37/04(2006.01)i, C12N5/0783(2010.01)n, C12N7/04(2006.01)n According to International Patent Classification (IPC) or to both national classification and IPC		
<b>B. FIELDS SEARCHED</b> Minimum documentation searched (classification system followed by classification symbols) C07K7/06, A61K9/127, A61K38/00, A61K39/12, A61K47/24, A61K47/28, A61P31/14, A61P37/04, C12N5/0783, C12N7/04		
Documentation searched other than minimum documentation to the extent that such documents are included in the fields searched Jitsuyo Shinan Koho 1922-1996 Jitsuyo Shinan Toroku Koho 1996-2011 Kokai Jitsuyo Shinan Koho 1971-2011 Toroku Jitsuyo Shinan Koho 1994-2011		
Electronic data base consulted during the international search (name of data base and, where practicable, search terms used) CA/BIOSIS/MEDLINE/WPIDS (STN), JSTPlus (JDreamII), PubMed, UniProt/GeneSeq		
<b>C. DOCUMENTS CONSIDERED TO BE RELEVANT</b>		
Category*	Citation of document, with indication, where appropriate, of the relevant passages	Relevant to claim No.
X/Y	Masanori MATSUI et al., "Peptide Ketsugo Liposome o Mochiita, Ebola Virus ni Taisuru CTL Yudogata Vaccine no Kaihatsu", 2010 Aug., Journal of Saitama Medical University, vol.37, no.1, pages 15 to 20, entire text	1, 9, 13, 15/ 2-8, 10-12, 14, 16
X/Y	Masanori MATSUI et al., "CTL Yudogata Ebola Shukketsunetsu Vaccine no Rinsho Oyo ni Muketa Kento", 2010 Mar., Saibosei Men'eki Yudogata Liposome Vaccine no Sosei ni Kansuru Kenkyu Heisei 21 Nendo Sokatsu Kenkyu Hokokusho, pages 18 to 23, entire text	1, 9, 13, 15/ 2-8, 10-12, 14, 16
<input checked="" type="checkbox"/> Further documents are listed in the continuation of Box C. <input type="checkbox"/> See patent family annex.		
* Special categories of cited documents: "A" document defining the general state of the art which is not considered to be of particular relevance "E" earlier application or patent but published on or after the international filing date "L" document which may throw doubts on priority claim(s) or which is cited to establish the publication date of another citation or other special reason (as specified) "O" document referring to an oral disclosure, use, exhibition or other means "P" document published prior to the international filing date but later than the priority date claimed "T" later document published after the international filing date or priority date and not in conflict with the application but cited to understand the principle or theory underlying the invention "X" document of particular relevance; the claimed invention cannot be considered novel or cannot be considered to involve an inventive step when the document is taken alone "Y" document of particular relevance; the claimed invention cannot be considered to involve an inventive step when the document is combined with one or more other such documents, such combination being obvious to a person skilled in the art "&" document member of the same patent family		
Date of the actual completion of the international search 27 December, 2011 (27.12.11)		Date of mailing of the international search report 10 January, 2012 (10.01.12)
Name and mailing address of the ISA/ Japanese Patent Office		Authorized officer
Facsimile No.		Telephone No.



## INTERNATIONAL SEARCH REPORT

International application No.

PCT/JP2011/073686

C (Continuation). DOCUMENTS CONSIDERED TO BE RELEVANT

Category*	Citation of document, with indication, where appropriate, of the relevant passages	Relevant to claim No.
Y	WO 2010/061924 A1 (SAITAMA MEDICAL UNIVERSITY, et al.), 03 June 2010 (03.06.2010), entire text & US 2010/0136098 A1	1-16
Y	WO 2010/061919 A1 (SAITAMA MEDICAL UNIVERSITY, et al.), 03 June 2010 (03.06.2010), entire text (Family: none)	1-16
Y	US 2010/0034843 A1 (MARY KATE HART, et al.), 11 February 2010 (11.02.2010), entire text & EP 1608393 A & EP 1119627 A & EP 1092031 A & WO 2005/023837 A2 & WO 2000/000616 A2 & WO 2000/000617 A2	1-16
A	JP 2008-037831 A (NOF Corp. et al.), 21 February 2008 (21.02.2008), entire text & US 2008/0038329 A1	1-16

A. 発明の属する分野の分類 (国際特許分類 (IPC))

Int.Cl. C07K7/06(2006.01)i, A61K9/127(2006.01)i, A61K38/00(2006.01)i, A61K39/12(2006.01)i, A61K47/24(2006.01)i, A61K47/28(2006.01)i, A61P31/14(2006.01)i, A61P37/04(2006.01)i, C12N5/0783(2010.01)n, C12N7/04(2006.01)n

B. 調査を行った分野

調査を行った最小限資料 (国際特許分類 (IPC))

Int.Cl. C07K7/06, A61K9/127, A61K38/00, A61K39/12, A61K47/24, A61K47/28, A61P31/14, A61P37/04, C12N5/0783, C12N7/04

最小限資料以外の資料で調査を行った分野に含まれるもの

日本国実用新案公報	1922-1996年
日本国公開実用新案公報	1971-2011年
日本国実用新案登録公報	1996-2011年
日本国登録実用新案公報	1994-2011年

国際調査で使用した電子データベース (データベースの名称、調査に使用した用語)

CA/BIOSIS/MEDLINE/WPIDS (STN), JSTPlus (JDreamII), PubMed, UniProt/GeneSeq

C. 関連すると認められる文献

引用文献の カテゴリー*	引用文献名 及び一部の箇所が関連するときは、その関連する箇所の表示	関連する 請求項の番号
X/ Y	松井政則, et al., ペプチド結合リポソームを用いた、エボラウイルスに対するCTL誘導型ワクチンの開発, 2010 Aug., 埼玉医科大学雑誌, Vol.37, No.1, p.15-20 全文	1,9,13,15/ 2-8,10-12,14, 16

C欄の続きにも文献が列挙されている。

パテントファミリーに関する別紙を参照。

\* 引用文献のカテゴリー

「A」特に関連のある文献ではなく、一般的技術水準を示すもの  
 「E」国際出願日前の出願または特許であるが、国際出願日以後に公表されたもの  
 「L」優先権主張に疑義を提起する文献又は他の文献の発行日若しくは他の特別な理由を確立するために引用する文献 (理由を付す)  
 「O」口頭による開示、使用、展示等に言及する文献  
 「P」国際出願日前で、かつ優先権の主張の基礎となる出願

の日の後に公表された文献

「T」国際出願日又は優先日後に公表された文献であって出願と矛盾するものではなく、発明の原理又は理論の理解のために引用するもの  
 「X」特に関連のある文献であって、当該文献のみで発明の新規性又は進歩性がないと考えられるもの  
 「Y」特に関連のある文献であって、当該文献と他の1以上の文献との、当業者にとって自明である組合せによって進歩性がないと考えられるもの  
 「&」同一パテントファミリー文献

国際調査を完了した日

27. 12. 2011

国際調査報告の発送日

10. 01. 2012

国際調査機関の名称及びあて先

日本国特許庁 (ISA/J P)  
 郵便番号100-8915  
 東京都千代田区霞が関三丁目4番3号

特許庁審査官 (権限のある職員)

福澤 洋光

電話番号 03-3581-1101 内線 3448

4B

3963

C (続き) . 関連すると認められる文献		
引用文献の カテゴリー*	引用文献名 及び一部の箇所が関連するときは、その関連する箇所の表示	関連する 請求項の番号
X/ Y	松井政則, et al., C T L 誘導型エボラ出血熱ワクチンの臨床応用に向けた 検討, 2010 Mar., 細胞性免疫誘導型リポソームワクチンの創製に関する研 究 平成 2 1 年度総括研究報告書, p.18-23 全文	1,9,13,15/ 2-8,10-12,14, 16
Y	WO 2010/061924 A1 (SAITAMA MEDICAL UNIVERSITY, et al.) 2010.06.03, 全文 & US 2010/0136098 A1	1-16
Y	WO 2010/061919 A1 (SAITAMA MEDICAL UNIVERSITY, et al.) 2010.06.03, 全文 (ファミリーなし)	1-16
Y	US 2010/0034843 A1 (MARY KATE HART, et al.) 2010.02.11 全文 & EP 1608393 A & EP 1119627 A & EP 1092031 A & WO 2005/023837 A2 & WO 2000/000616 A2 & WO 2000/000617 A2	1-16
A	JP 2008-037831 A (日油株式会社, et al.) 2008.02.21, 全文 & US 2008/0038329 A1	1-16